

嘘から出た……

フチタカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

僕たちは手を伸ばす。

嘘で固めた足場の上、かなわぬ夢へと。

目次

かくして彼は嘘を選択する	1
されど彼の目には映らない	22
そして彼は嘘を重ねる	44
ゆえに彼等は戻れない	67
しかして彼は壊れゆく	87
彼が差し出すは己のみならず	118

かくして彼は嘘を選択する

——彼女は僕にとっての太陽だった。

知り合ったのは中学三年生の頃。

クラス替えが終わって隣の席に座っていた彼女は僕へ向けて、見る者全てを幸せにするような……そんな輝く笑顔をくれた。

「私は高坂穂乃果！ よろしくね！」

底抜けに明るい声と、サファイア色の澄んだ瞳。

ただでさえ内気で、女の子と上手く話せない僕はただただ俯いてぼそぼそとした返事を返す事しか出来なかった。けれど、彼女はそんな事など意に介さずにと笑顔を見せていてくれた。

可愛らしくて優しい子だな。

単純な感想。

しかし、思えばその瞬間から僕の心は彼女に奪われていたのかもしれない。

席が隣同士だったせいも、彼女はそれからもよく話しかけてくれた。

同じクラスの二人の親友の話、家の話、好きなテレビ番組の話。授業が始まる五分前の積み重ねで、僕は彼女の事をたくさん知って、より深く引き込まれていく。

心から楽しそうに自分の話をして、女子慣れしていない僕のたどたどしい、面白くもない話を嬉しそうに目を輝かせて聞いてくれる。時には頷いたり、時には首を傾げたり。彼女なりの大きな仕草で相槌をうつ。

僕はそんな彼女の笑顔が見たい一心で、一生懸命言葉を紡いだ。

「君は面白いねっ！ 穂乃果、楽しいなあ」

純粹な彼女はきつと、同じ言葉を色んな友達に言っているはずだ。僕にだってそのくらい分かってはいたけど、それと同時に、僕は彼女がそういう言葉をいつだって本心で言っている事も知っていた。

だからこそ、心から嬉しくて、そっと机の下でガッツポーズをしたことを覚えている。でも、そんな楽しい時間は続かない。

席替え。毎日の楽しい時間は、そんな何気ない出来事で終わりを告げた。

日課だった会話は無くなり、一抹の寂しさだけが胸に去来する。彼女の笑顔が見たい。彼女と話がしたい。素直にそう感じ始めたのだ。

そうして僕は自覚する。

——僕は、彼女の事が好きだ。

もちろん、人懐っこい彼女はそれからもちよくちよく話しかけてくれた。おはよう。バイバイ、また明日。高坂さんはそう言う人だ。誰に対してもフランクで、どんな人とも仲良くできる。

でも、僕は彼女にアクションをかけて貰うだけの自分が本当に……嫌いだった。だからと言って、人の性格はそう簡単には変わらない。

内気な僕はどこまで行っても内気なまま、そんな彼女の優しさに甘えて変わらない日々を過ごしていたんだ。

しかし、ある時ふと気が付く。

たしか、それは昼休みの事だったかな。

本当に偶然、僕は読んでいた本から顔をあげた。

目の前を通り過ぎる人影。同じクラスの南ことりさんの影が一瞬本に重なる。つられて彼女が歩いて行く先を見ると、高坂さんとその友達、園田海未さんの姿があった。

南さんは何やら高坂さんに話しかける。

丁度その時、僕は高坂さんの正面の位置に居た。

ただの偶然。でも——その一瞬が、僕の世界を変えることになる。

彼女は、南さんの言葉でふわりと笑った。

いつもの快活な輝くような笑顔ではなく、気を許した人にだけ見せる優しげな、花がほころぶような笑顔。僕はそんな彼女の表情を二度と忘れないだろう。

それまで、一応僕は高坂さんへの恋心を自覚しているつもりではいたのだ。

でも、気が付く。それは恋などではなく、ただの憧れだったのだと。

だからこそ何一つ行動を起こせないし、ただそつと見守るだけで満足している自分が居た。しかし、そんな意識は百八十度変化する。きつと、このままじゃ駄目なんだ。

僕はやつと理解した。自分自身の本当の気持ち。

彼女の笑顔がどれほど眩しくて、愛おしいものであるか。もつと、彼女の表情を見たい。

出来ることならば、僕だつてもつと彼女を笑顔にしたい。

心からそう思った。

恋なんてしたことのない僕だつたけど、初めて生まれたそんな気持ちをそつと胸の中で温めはじめた。燃えるような情熱だと本では読んだけど、僕の胸に生まれたのはそん

な表現とは似ても似つかない、優しく暖かい感情だった。

その日から、僕は生まれ変わる。

おしやれとはとても言えない、ただ伸びていただだけの髪型を変えようと思いつ。恥ずかしさから顔を真っ赤にしながら美容院に行つて、カットして貰つた。ワックスだつて買ひ揃えて、一生懸命使い方を勉強した。

口下手な自分を変えたくて、頑張つていろんな人に話しかけたり、お笑い番組を見て、友達を自分の力で笑わせられるように努力した。

勉強も、スポーツも。同じくらい必死にやった。

高坂さんとまた楽しく話がしたい。

あの笑顔が見たい。

その一心で、僕は自分を変えようと頑張つたんだ。

「お前、変わったな」

「く君、格好良くなつたよね」

誰もがそう言ってくれる。

でも、高坂さんは。

——いつだって、いつもと同じあの笑顔を向けるだけだった。

何度だって話しかけたよ。

一生懸命話をした。たくさん面白い話をしたつもり。

それでも彼女との距離は縮まらない。

もちろん、カノジョをとつかえひつかえするアイツみたいな恋愛的なアプローチをしてはいない。

ただの友達として、少しだけ積極的に絡んでいただけだ。いつか。いつか僕の気持ちに気が付いてくれることを信じて。

……。

いや。それは嘘。

実際の所、自分の言葉で彼女の笑顔が曇ることが何より怖かっただけなのだ。好意をむき出しにしてアタックすることは、もしかしたら恋人を作る手段としては凄く有効で重要な手段なのかもしれない。

でも、僕は違う。

恋人にはなりたくないよ。

彼女が一番傍で、笑っていたい。笑わせてあげたい。

でも、今のこの、お互い楽しく笑い合える関係を失いたくもない。

幼い僕の、そんな幼い考え。

いつの間にか月日は流れて……。

今日、卒業式を迎えた。

タツタツタツタ。

僕は校内を足早に駆け抜けた。

卒業式は終わり、僕の右手には卒業証書と胸元には大きな造花がくつつついていて。周りにはいる同級生は一つでも多く思い出を残そうと、今日ばかりは使用を許された携帯電話を使って仲の良かった友達同士で何枚も写真を撮っていた。

僕も何度か呼び止められて一緒に写ろうと言われたものの、ごめん、あとにして貰えないかな？ と、頭を下げて、彼女を探していた。

一日考えたんだ。

僕は一体どうするべきなのかって。

卒業式の間中。

いや、この半年間ずっと同じことを考え続けて来た。

高坂さん。僕の初恋の相手はこの春から音ノ木坂学院に入学することが決まったらしい。今日の朝、なぜか南さんが教えてくれた。高坂さんの家族全員が通つたらしい。

その高校は……女子高。

つまり——もう、僕は彼女と会うことは無い。

この日が来ることはずっと前から分かつていた。

二人を分かつこの時は、前もって知らされていたのだ。それでも僕は一步前に踏み出す勇気が出ずに、今日まで問題を引き延ばして来たのだ。そして、先ほどやっと答えが出た。

ダメ元で良い。

今日、この想いを高坂さんに届けよう。

僕は息を切らせて彼女の姿を探していた。

高坂さんの事だ。今はきつと、たくさんの友達に囲まれて、あの素敵な笑顔を振りまいている。もしかしたら、僕がこれから行おうとしているその行為は、彼女の笑顔を曇らせることになるのかもしれない。

それは彼女にとつても、そして何より僕にとつて、心から辛い事だ。それでも……。

今この瞬間を逃したら、もう二度と僕は彼女の笑顔を見られない。

夢だった、かつてみたあの優しい微笑みを引き出すことは叶わない。

仮に、一パーセントでも可能性が残されているのなら。それにかけてみよう。

「あの……」

「えっと、何？ ごめん、今急いでて」

「うんっ。す、すぐ済むから、その……」

同じクラスの女の子から呼び止められる。

頬を染めて俯く彼女の様子に戸惑いつつも、先を急いでいることを告げて続きを促した。一体なんだというのだろう。僕にはやらなきゃいけない事が……。

落ち着かなくソワソワとする彼女を見る。

「もし、あげる予定がないなら……」

やっと決心が付いたのか、彼女は顔をあげた。

「うん。どうしたの？」

一瞬の間。

そして。

「第二ボタン。私にくださいっ!」

彼女はそう言うと、顔を真っ赤に染めて、卒倒しそうな顔で頭を下げて来た。僕はそんな予想外の言葉にただただ驚いて、あんぐりと口を開ける。僕の第二ボタン? そんなものを貰ってどうするのだろうか?

僕はしばらく呆けたまま考えを巡らせて、やっと一つの答えに辿り着く。

「えっと、それは……」

「うんっ。そうだよ。告白は、しないけど」

彼女はそう言って少しだけ泣きそうな顔をしてそう言った。

「私、あなたが誰の事を好きかは分からないけど、私以外の誰かに恋をしてるって事は分かってるよ。だから……」

そう言つて、彼女は俯いた。

なんで、どうしてばれたのだろうか?

僕のそんな表情を見て、彼女は儂げな笑顔を見せる。

「あれだけ一生懸命変わろうとしてるあなたを見たら、誰だつて気が付くよ?」

「そ、それは……」

「でも、そんなあなたを私は……。だから、告白はしない。でも、せめて私に、思い出だ
けでもくれませんか。だめ、かな？」

「……うん」

僕はそつと、自分の第二ボタンに手をかけた。

消え入りそうな声でそう告げる彼女が、酷く誰かに……。僕に似ているような気がし
て。

優しく彼女の手を取って、その手の平にボタンを。この三年間ですこし凹んで汚れて
しまった金色のボタンを静かに乗せた。

「それじゃ、僕はもう行くね」

「うん。告白、上手くいくといいね？」

「……そう、だね」

僕はそつと唇を噛みしめて、走り出す。

——ごめんね。僕はきつとこれから振られるんだ。

でも、ありがとう。

少しだけ、少しだけ自信が付いたような気がする。いままでしてきた努力が少しは意
味があつたんだって、そう思えたから。

見慣れた校舎の中を駆け抜ける。

僕は、この景色を次第に忘れていくのだろうか？ 廊下の壁についた学際のペンキ後。細かい傷のついたクラス表示板。結局使われなのまま、掃除だけ沢山させられた消火器の入っている箱。

通り過ぎる友達と、恩師の顔。

それらはいいつも、僕の日常の中にあつた。

毎日毎日。

会いたくなくても、見たくなくても目に入る。かけがえのない欠片たち。

それらのピースで作られた世界から、僕たちはこれから抜け出すのだ。

……いや、そうではない。

きつと、その世界は一度壊れるのだろう。

一つ一つの欠片は思い思いの場所へと飛んでいく。形成されていた世界は一度終わりを迎えて、欠片たちが飛び立った先で、それらはまた新たな世界を作り出すのだ。

違う場所、違う思い、違う願い。

もしかしたらそれは当たり前のことなのかも知れない。

それでも僕には、どうしても失いたくない欠片があつた。

僕を照らしてくれた太陽を。

——君を、失いたくない。

彼女はやはり、大勢の友達に囲まれていた。色んな人と写真を撮って、いつものあの笑顔を周りの人みんなに向けている。不思議と、どこに居ても彼女は目に入ってくる。僕とは違う、生まれながらの太陽。

拳を握り込んだ。

決めたんだろう？ 覚悟を。

彼女を失いたくないのなら、叶えたい願いがあんなら。

この足を踏み出さなければならぬ。

僕は、大きく息を吸い込んで、その右足をあげた。

瞬間。

そつと背中を引っ張られる感触が制服越しに伝わって来る。

優しげな、若草のような香りと、鈴のなるような可愛らしい声。

「待って」

静かに振り返る。

「南……さん？」

彼女は強い覚悟のこもった、それでいて悲しげな眼差しを送っていた。

「ごめんね。邪魔、しちゃった」

人気のない屋上へと連れられるままに辿り着いた。

そして彼女は振り返るなり、寂しそうに笑いながらそう言う。

僕は彼女の意図が分からないまま曖昧に頷いた。

正直、邪魔をされたという感覚はぬぐえなかった。が、彼女は理由もなく誰かの邪魔をするような人では無い。あまりこの一年で仲が良くなったわけでは無いが、高坂さんと話す彼女が悪人で無い事くらい重々承知していた。

「穂乃果ちゃんに、告白しようとしたんでしょ？」

凄くシンプルに、そう投げかけられる。

そうか、やっぱり彼女は気が付いていたのだ。僕の抱えたこの思いに。

この後に及んで隠す気も無ければ、その意味もないので素直に頷いた。

「うん。そうだよ。僕は今日、高坂さんに告白する」

「ダメ……だよ」

「どうして？」

「ことりは穂乃果ちゃんのプロ友だもん。だから分かるよ。今告白したって、あなたは振られちゃう」

かけられた言葉は、何よりも非情で、至極真つ当な物だった。

そうか、やっぱりそうだよな。

一パーセントくらいは可能性が……なんて、僕が勝手に自分自身を奮い立たせるために作った嘘つばちだったんだ。僕はその事に内心では気が付きながらも、そんな優しい嘘に身を委ねて歩き出そうとしていた。

「やっぱり、そっか」

「うん……」

「ありがとう、南さん。君は優しいんだね」

「……っ！」

彼女が僕をわざわざ呼び止めて、こんなことを言ってくれるのはひとえに彼女の優しさだろう。無駄に傷つこうとする僕への思いやりと、そのせいで卒業式というこんな日にバカな男に言い寄られ、味わう必要のない罪悪感を感じてしまうであろう親友への思いやり。

僕はそう考えて、静かにお礼を言った。

でもその瞬間、南さんは目に涙を溜めて、俯いた。

「南さん？」

「ことりは……ことりはそんないい子じゃないよ」

小声でそう呟いて再び顔をあげた彼女の両目に、涙はもうなくなっていた。

「あなたを呼び出した理由はね。こつりのわがままなんだ」

「わがまま？」

「うん。ごめんね。でも、聞いて欲しいの」

寂しげに微笑みながら、彼女はそう言った。

僕は返す言葉のないまま、静かに南さんを見守る。

肌寒い風が彼女の髪の毛を揺らし、乱していった。

「ことりは……」

なぜだろう。

ふと先ほどの女の子を思い出す。

どこか強い思いを宿した物悲しくも力のある相貌。

……そして目の前に立つ彼女は、先ほどの女の子が霞むほどの強い覚悟をその笑顔の裏に湛えている。そんな気がした。

沈黙。

風の音さえ、聞こえなくなつた。

そして彼女は言葉を紡ぐ。

「ことりは……ことりはあなたの事。ずっとずっと好きでした」

儂い、今にも消え入りそうな笑顔と共に告げられる。

僕は何もできないまま、ただただ突っ立っていた。

「あなたが穂乃果ちゃんのを好きだつて事も知つてたよ。でも、なんとか穂乃果ちゃんに好きになつて貰おうと努力するあなたからいつの間にか目を離せなくなつてた」

「僕の……努力？」

「うん。誰かを好きになったって気持ちを、自分の為に、そして誰かの為に前向きの方に
変えて前に進んでいくあなたの事をことりはずっと見てたんだ。穂乃果ちゃんと話す
あなたの笑顔と……ちよつとだけ寂しそうな横顔」

「……」

「えへへ。いつの間にか……好きになっちゃってた。叶わないからダメだって。何度も
何度も言い聞かせて来たのに。それでも、あなたが穂乃果ちゃんに向けるその気持ち
が、少しでも私に向いてくれたらいいのにつて」

気付かなかった。

それが真っ白になった頭で思う純粹な感想だ。

先ほどの女の子の事だつてそうだ。僕は何一つ気が付いていなかったのだ。太陽に
目を向けるのが精いっぱい、その眩しさから逆に僕の事を見ていてくれた人の視線
に気が付けなかった。

結局のところ、僕は自分が傷つくのを恐れていたくせに、平然と誰かを傷つけていた
のだ。この世界は太陽と自分だけ。そんな訳ない事くらい分かっていたはずなのに。

「僕は……」

「うん。ことりはあなたの気持ち、すつごく良く分かるんだ。だって、絶対に叶わない相

手に恋をしているもの同士なんでもん。でもね……」

南さんはふわりと笑った。

「きつと、出した答えは違うの」

出した答え？

僕と同じ、玉砕の道を選んだのではないのか？

だからこそ僕を呼び出して、告白をしたのでは……。

しかし、南さんの口から告げられたのは、予想だにしない台詞だった。

「こつりと付き合えば、これからだつて穂乃果ちゃんと会えるよ？　そうすれば、あなたの望みだつていつかは……」

息を飲む。

「南さん。それは」

「うん。今は嘘でも良いの。こつりはまだ、あなたを諦めたくない。まだ、同じ世界で生きていきたいの」

僕はそつとため息をついた。

南さんと付き合いさえすれば、その親友である高坂さんと会える口実も出来るだろう。時間をかけて仲良くなつて、何年後かは分からないけどいつの日か彼女の気持ちを

引き寄せることが出来るのなら！

……僕はそこまで考えて。首を振った。

「ダメだよ。南さん。僕はキミを利用してまで高坂さんと……」

「それは違うよ」

「……？」

南さんは確かな覚悟のこもった眼差しで僕と目を合わせた。

「ことりだつて、あなたが私の事を好きになつて貰えるよう、頑張るから」

「それは……」

「今はまだ、○パーセントだよ。でも……あなたが穂乃果ちゃんに見て貰えるようになるために頑張つたのと同じくらい。いや、もつと！ことりだつて努力して見せるから！」

「南さん……」

「これはね、あなたと私。両方のゼロパーセントを、一パーセントにあげるためのたった一つの方法なんだ」

だからね。

南さんはそう呟きながら真つ直ぐに僕の瞳を見つめる。

その目はどこまでも澄んでいて……。

「ことりと、付き合ってください」

僕は静かに、頷いた。

この選択が正解だったのか、それとも間違っていたのか。
その答えなど、知る由もない。

かくして彼は嘘を選択する——了

されど彼の目には映らない

混濁した意識の中、汗で湿った手を無意識のうちに握りこむ。決して寝苦しくない気温の部屋で、僕はうまく眠れないまま布団の中で寝返りを打ち続けていた。自らのついた嘘は確かに自分自身の精神を蝕んでいる。

……当たり前か。僕はそれだけのことをしてかしたんだ。

『おめでとー！』

僕の脳内に、高坂さんの嬉しそうな声が反響する。

唇をかむ。少しだけ、血が滲んだ。

ぐちやぐちやな脳内が、なぜか少しだけ落ち着いた気がしてそつと体を起こす。

僕は南さんの提案を受け入れて、彼女と付き合うことになった。

それはお互いが、お互いの望みを叶えるために必要な嘘。

僕は、その代償を早くも支払うことになる。

僕と南さんは一度別れて、それぞれの友達に挨拶をして回ることになった。何といつてもその日は卒業式で、僕らは僕らの世話になった先生や友達に挨拶しない訳にはいか

ない。

幸か不幸か。自分達がついてしまった嘘の重大さをお互いにまだ理解できていなかった二人は、すぐに輪に溶け込む事が出来た。

何してたんだよ！ おつ、第二ボタン誰にあげたんだ？

そんな軽口にも、特に苦勞することなく答えることができる。

もちろん、南さんと付き合うことになったことは誰にも言わなかった。

言つてはダメだった訳でもないし、むしろ言つた方が良かったのかも知れない。そうすれば僕の周りに集まってくれた友達にいい話のタネをあげられたかもしれないから別に、秘密で付き合うわけでもないため、彼女から止められてもいなかった。

——でも、僕はそつとその事実を飲み込んだ。

それは誰かに遠慮したわけでも、隠したかった訳でもない。

分からなかったのだ。

どんな顔をすれば良いのか。

そして、どんな気持ちになれば良いのか。

もし、伝えてしまえば、僕は笑わなくてはならないだろう。

そうだよ、さつき付き合う事になったんだ、つて。少しだけ恥じらいながら、幸せそうな表情で。

でも、そんな事は出来ない。誰かを好きになつて変わったことがバレバレだった事実から、僕がどれだけ演技などとかけ離れた位置にいるのかは自明だ。

だとしたら、なぜあんな選択を？

そう聞かれたら黙る他ないけれど……。

きつと、あの時の僕は……僕たちはどうかしていたのだ。その嘘が、どんな結末を招くのか、周りにどんな印象を与えるのか。これから先どれだけの苦勞を強いられるのか。そんなこと少し考えれば分かったはずなのに。

でも、そんな簡単なことが見えなくらい高坂さんの放つ輝きは、僕のこの目を眩ませていた。

きつとそういう事なのだろう。

「ね、挨拶は終わった？」

友達と一通り写真を撮り終えて、一息ついていた時のこと。ふと学生服の袖をつかまれた。鈴のなるようなかわいらしい声と、優しい女の子特有の甘い香りが鼻孔をくすぐる。振り返ると、少しだけ照れたように笑う南さんの姿があった。

「うん。一通りはね。南さんも？」

「こつとも丁度。これから時間はある？」

「特に予定はないかな。どうしたの？」

「……穂乃果ちゃんと、海未ちゃんに報告しなくちゃだから」

「……そうだね」

僕はぎこちなく頷いた。

「うまく、演技できるかな」

少しだけ不安になって、そうこぼす。なんとなく、南さんは飄々とそういう事をこなすし、どうにでも僕には自信がなかった。それを察したのか、南さんは頷きながら励ましてくれる。

「大丈夫だよ。二人とも、恋愛とか、そういう事に関しては経験がないから」

「でも、僕もどういう感じで行けば良いか」

「ふふ。そうだね、あなたは嘘が苦手そうだもん」

「う……、どうやらそうみたい。この数時間で気付かされたよ」

「でも、だからこそ素敵なんだよ？」

彼女はそう言ってまた、恥ずかしそうに笑った。

きつと、彼女なりの努力。僕はそれが分かって、そつて視線を外した。僕にはまだ南さんの好意をまつすぐに受け取るだけの器量も、覚悟もなかったから。

あいまいに笑って、小さく頷く。

卑怯者の常套手段。

「普段通りでいいのかな？」

「うーん。二人のことだから、いろいろ聞かれるかも。今日はあんまり時間ないから大丈夫だろうけど」

「う……そうだよね。親友の恋人には興味も出るだろうし」

傍から見ただけでも彼女たち三人のつながりはとても深いように見える。一緒に過ごしてきた時間も、お互いへの思いもきつと僕が想像できないくらい大きいはずだ。そんな二人。ましてや高坂さんを僕は騙せるのだろうか。

おそらく、今日のところは大丈夫だろう。クラスごとに打ち上げがあったりするのでこまごまと馴れ初めや好きになった理由などを聞かれることはないだろう。しかし、これから先そういう事を問われるタイミングは必ず来る。

そう考えて途方に暮れていると、南さんがちよつとだけ悲しそうに解決策を出してくれた。

「ここのことを、穂乃果ちゃんだと思つて答えてくれれば上手くいくんじゃないのかな」

視線は合わせてくれない。

気のせいかも知れないが、少しだけその瞳が濡れているように見えた。

「えっと、それで大丈夫なのかな」

「うん。嘘がつけないなら、本当のことを言えばいいんだよ」

「でも……」

「そんな顔しなくて良いんだよ、気にしないで？　ことりがそうしたら良いって言ったんだから」

僕を好きだと言ってくれる南さんを前にして、高坂さんへの思いを、あたかも南さんへの恋慕であるように話すなんて。それは本当にやって良いことなのだろうか。

「僕は……」

「それで、嘘がつけるならことりは大丈夫。だって、あなたさえうまく話せればことりがボクを出しちゃうことはないし」

その言葉の意味。それは。

「だって、ことりのあなたへの気持ちはホンモノだもん」

だからといって、平気なはずないことくらい分かっているのに。

彼女の台詞に頷いてしまう僕はきつと、最低なのだろう。

そして、僕らは高坂さんと園田さんの元へと向かった。

楽しく談笑する友達に僕らを引き留めることはない。たった一人だけ、意外そうな、それでいて寂しそうに僕らを見つめる女の子がいた。その手には先ほどまで僕の胸についでいたボタンが一つ。

彼女が、今の僕の置かれている状況を知ったとすればどう思うだろう。

幻滅するだろうか、嫌いになるだろうか。

そんなことはわからないけれど、後ろめたいこの気持ち自体が、僕自身の選択の過ちを示しているのかもしれない。

それでも僕は……。

「どうしたの?」

「いや、なんでもないよ」

隣を歩く共犯者。

違うかな。一番の被害者だ。

もちろん、加害者は僕。

「えっと、穂乃果ちゃんたちどこにいるんだろ。ここらへんで待ってて言ったのに」

「あそこじゃないか? あの花壇のそばの」

「あ、本当だ。穂乃果ちゃん!」

「あー！　こーとーりーちゃん！」

南さんの声に反応して、相変わらず元気の良い声が返ってくる。僕の友達は彼女を暑苦しいって言ったり、うるさいって言ったり、女の子らしくないなんて言ったりするけれど……やっぱり高坂さんはとても眩しかった。

「海未ちゃんもいるよ！　……見つけるの、早いね？」

「……たまたまだよ」

僕たちは小走りで二人の元へと向かった。高坂さんは元気よく、園田さんは僕を気にしてか控えめに手を振っている。

「ことり、どうして？」

なぜ僕が一緒にいるのかと聞きたかったのだろう。別段いやそうな様子はなかったが、おそらく男自体があまり得意でないらしくあまり僕と視線を合わせようとせずにそう言った。

「うん。ちよつとねっ」

少しはぐらかすように言葉を返す。園田さんは軽く首を傾げながら南さんを見つめていた。

「そういえば、君とまだ写真撮ってなかったよね!？」

「あ、うん」

いつものあの笑顔で高坂さんが走り寄ってくれた。彼女の手には、おそらく親御さんから渡されたのだろう、中学生には少し似合わない銀色のデジカメが握られている。

「一緒に撮ろうよ！ 今日のためにお父さんからデジカメ借りてきたんだあ」

「そうなんだ。いいね。僕は携帯しか持ってなくて」

「うんっ！ どうせなら綺麗な写真がいいでしょ？ また印刷して渡すから待ってて

ねっ。海未ちゃん、撮って撮ってー！」

「穂乃果、いいですけどどうやって渡すのです？ スマホの方が後々楽ですよ」

「あゝ、そっかあ。君とは別々の高校に行くからもうなかなか会えないもんね」

寂しそうに彼女は呟いた。

そう、高坂さんはこういう人だ。別に嘘や、演技でなくこういう事を言ってくれる。

好きとか好きじゃないとか、そういう事じゃなくただただ自分と関わる人間全員へ平等に想いを配ることが出来る。

だからこそ、僕は彼女を好きになった。

でも、僕は。

——そんな『平等』を、変えたいと思う。

だからこそ、嘘で固めた足場に乘つかるのだ。届くはずもない太陽へとこの手を伸ばす。

「いや、これからも会えるよ」

静かに返した。

南さんと視線が交錯する。

「どういう事でしょう？ いえ、別に会いたくないという訳ではないのですが」

「えっと、ことりちゃん？」

自分たちと同じように、疑問の声を上げなかつた南さんを不思議に思ったのか高坂さんが彼女の方を向く。南さんは僕の横まで来ると、そつと僕の背中に手を当てた。小さな手がわずかに震える。

その動揺の理由が僕にもわかる。

優しい彼女が、初めて自分のためだけに親友二人に嘘をつくのだ。

「あのね、穂乃果ちゃん、海未ちゃん」

一呼吸。

「私たち、付き合う事になったんだ」

僕はその時のことを思い出して、ベッドに腰を掛けたまま深くため息をついた。

『おめでとう！』

予想していたことだ。分かりきっていたことだ。

彼女が僕に興味がなかったことくらい、十分承知していたはずなのに。

彼女が紡いだたった一言は深く僕の心を切り裂いた。そこには僕が南さんと付き合い事に対する戸惑いなどはなく、純粹な祝福だけがあつて……少しでも残念な顔をしてくれたら、なんて勝手な感想を抱く。

園田さんは初め不安そうに僕の方を見ていたものの、隣に立つ南さんの顔を見てそつと頷いた。

僕はどちらかという我真面目な方で、特に悪い噂だつてなかったから彼女も親友の決めたことなら、と納得してくれたのだろう。

こつりを泣かせたら許しませんよ、と少しだけ凄んだだけで、微笑みかけてくれた。

泣かせたら許さない、か。

寝苦しい布団の中から這い出して、カーテンを開けた。時刻は午前六時前。普段なら

白み始めるはずの空も、今日は雲に覆われて陰鬱な灰色に染まっている。

僕が、南さんを泣かせない未来など存在するのだろうか？

全てが上手くいって、高坂さんと両思いになれたのなら、彼女は人知れず涙を流すだろう。うまくいかなかったとしても、僕はきつと彼女を泣かせてしまう。南さんには悪いけれど、今の僕には高坂さん以外の人に好意を持つなんてこと出来そうにない。

僕は小さくため息をつきながら、充電途中だったスマホを手に取る。

今は四月の下旬。少しだが、学校に慣れ始めた僕たちは久しぶりに会うことになった。

点灯するライトに、つい先ほど届いたばかりのメッセージ。

いやに早起きだな。もしかしたら彼女も眠れて居ないのだろうか。

『今日、午前十一時に駅前のカフェの前で待ってるね』

可愛らしいスタンプとともに、デートの誘いが入っていた。僕はそれに行かなくてはならない。なぜならそれは、彼女と交わしたルールのうちの一つだから。

南さんと付き合う事になってから、丁度二日後。僕たちは初めて二人だけで出かけることになった。

それはデートなどではなく、これからのことを決める大事な話し合い。

そこで僕たちが決めたルールは次のようなものだった。

僕は南さん二人で会う時間を確保して、その代り、南さんは僕が高坂さんと会う機会を作る。

別に何も難しいことはない。南さんと僕の両方が平等に自分の望みを叶えられるように定められた決まり。だからこそ、僕は今日、彼女とデートをするのだ。

天気は曇天。僕たちの初デートには相応しい。

「ごめーん！ 遅れちゃった……」

集合時刻から十分ほど遅れてだろうか、南さんが慌てた様子で姿を現した。なんとなく、集合時間は厳守するようなまじめな子だと思っていたせいかな、少しだけ驚く。もちろん、十分やそこらで目くじらを立てる人間ではないので、むしろ抜けてる可愛いところもあるんだなあと軽く微笑んだ。

会っていないなかったのは卒業式の二日後から今日まで……大体一か月くらいだろうか。どうやら僕らの歳の一か月は大きく人を変化させるみたいで、彼女は僕の記憶の中の姿から何倍も可愛らしくなっていた。

中学時代、ほとんど見る事のなかった南さんの私服。

彼女のセンスが伺える。本当によく似合っていた。真っ白いブラウスに、紺色のフリル付きのスカート。派手すぎず、それでいて可憐な彼女の服装は、僕のような女の子に耐性のない男子が憧れる類のものだろう。

事実、僕は確かに彼女の可愛さに目を奪われた。

先月までは全くしていなかったはずの化粧にも慣れたらしい。どこか大人びた印象も受ける。時折、通りすぎる男性の目を引くその姿。

しかし、僕は何事もなかったかのように返事を返した。

「いいよ。僕も今来たところだから」

可愛いよなんて、言いはしない。

その気遣いは僕たちの間に必要はないだろう。

「それじゃ、まずお昼食べよっか」

「そうだね、どこがいい？」

「ことりのお母さんがおススメのお店を教えてくださいただけど……」

「うん、いいね。そこに行こうよ」

僕はそう答えて、歩き始めた。

せめて、友達としては彼女に楽しい時間を過ごしてほしい。僕はそう考えて、できるだけ楽しい話題を隣を歩く南さんに投げかけた。弾む会話、こぼれ出る笑い声。一生懸

命人との話し方を勉強した僕にとっては造作もないこと。

高坂さんの為に身に着けたこのスキルを、南さん相手に使う。そんな罪悪感を頭の隅に追いやって、僕は話を続けた。

ふと、会話が途切れる。

急に南さんの注意力が散漫になったのだ。

会話は相手の反応や動きが大事。僕はいち早くそれを察知して、沈黙を守る。

どうしたというのだろうか？

優しい彼女は、一生懸命自分と会話を楽しんでくれている相手をないがしろにするよ
うな人ではない。きっと、何か訳があるはずだ。そつと、彼女の表情を伺った。その目
に浮かぶのは、躊躇い、そして……羞恥。

「あの……手、繋いでも良い？」

「……手を？」

「うん。いや、かな？」

「嫌じゃ……ないよ」

嫌ではない。

それでも……。

「だって、恋人だから」

「……うん、そうだね」

僕はそう答えて、優しく彼女の右手をとった。小さく、そして柔らかい華奢な手のひら。南さんは少しだけ強めに僕の手を握り返してきた。

僕たちは恋人だ。

僕たちはその嘘を守らなくてはならない。

彼女が望むのなら答えなくてはならない。

それが、僕が高坂さんを求める代償なのだから。

僕たちはいろんな話をした。

ご飯を食べているときも、街を歩いているときも。

どうやら、南さんたち三人は無事新しい学園生活に慣れ始めているようだった。聞いた話によると、例年より入学した人数が少なかつたせいかクラス自体はかなり減つたらしい。が、その分生徒同士の結びつきが強いみたいで、特に不満な点はなさそうだ。

相も変わらず高坂さんは園田さんや南さんに迷惑をかけているらしいが、それだけ彼女が南さんたちに心を許しているのだろう。楽しそうな三人の思い出話を聞いて、なぜか少しだけ嫉妬してしまう。

僕も今のところ学園生活は順調だ。

中学が同じだった連中も何人か来ているし、新しい友達もできた。それに……。

「彼女がいるって、みんなに言ってるの？」

「うん。その方が、いろいろと楽そうだから」

初めからそう公言してしまえば、厄介なことに巻き込まれることはないだろう。別に、僕が同じクラスの女子から好きになられる事を予想したのではない。もちろん、それも考慮に入れてのことだが、一番の理由はそういう話を未然にシャットアウトするためだ。

僕には彼女がいる。

その一言は、誰かから行為を向けられること、逆に誰かに好意を持つっていると噂されること。いろんな可能性を未然に防ぐ事が出来る。初めは話のタネがないせいによく追及されたりしましたが、一か月もたてばもうそんな話はされなくなっていた。

「ことはまだ、二人にしか言っていないよ」

「女子高だと話は変わりそうだしね」

「うん。きつと、放課後になつても返してくれないよ。いまだに穂乃果ちゃんや海未ちゃんからいろんなこと聞かれるし……」

「そういえば、今日は」

「うん、夕方に海未ちゃんと穂乃果ちゃんがうちにくるよ」

「そっか」

僕は別に後日で良い、と言ったのだが不平等なのは良くないと、南さんは僕が高坂さんと会う機会を作ってくれた。先の二人も、僕と会って話す事には当然興味があったらしく、二つ返事でOKしてくれたらしい。

現在時刻は午後四時。

僕たちは南さんの家の前まで来ていた。

「はい、遠慮なくあがって?」

「おじゃまします」

綺麗に掃除がされた玄関に入り、連れられるまま階段を上がる。カギを使って家の中に入ったのを見たあたり、親御さんは今家にはいないはずだ。もちろんそんなことを気にする意味などないのだが。

しかし、なんとなく落ち着かない気がして問いかける。

「えっと、お母さんとかは……」

「お母さんは仕事で出かけてるよ。学校の経営が最近芳しくないらしくて。今日も遅く

なりそう」

「そうなんだ。そういえば音ノ木坂の理事長さんだっけ」

「うん。やつぱり、今年私たち入学者が少なかったのは大きな問題らしくて……」

「大変そうだね。うん。今は大丈夫だけど、来年あたりかどうなるか」

そんな話をしながら、僕は案内されて彼女の部屋に入った。

女の子の部屋らしく、白を基調とした可愛らしい家具が揃っている。

「つまらない部屋でごめんね？ 遊ぶものとかは置いていなくて……」

いつも、遊ぶ時は穂乃果ちゃんの家だったから、と彼女は申し訳なさそうに言った。

「いいよ、僕の家も似たようなものだし。少し散らかってるけどね」

「そうなんだ。綺麗好きそうなのに」

「うーん。男にしては綺麗好きかも。でも南さんの部屋の方が断然綺麗だよ」

「昨日頑張ってお片付けしたんだ」

「ははっ。 だろっうね」

「もう。 だろっうねって酷いよお」

ぷくつと頬を膨らませて見せる南さんに微笑みかける。

中学生の頃は真面目で優しい女の子だって印象が強かったけど、意外とこんな表情も見せてくれる。 那样的に言えば、僕たち男子の中では高坂さんより南さんの方が人気があつ

たなあ、とふと思いついた。

「どうしたの？」

そつと、僕の隣に腰を下ろして問いかける。

急に香る女の子らしい匂いと、服越しに感じる柔らかな感触に視線を泳がせた。

「いや、なんでも……」

「そっか」

少しだけむず痒い、まるで本物の恋人のような雰囲気。

僕が彼女の手さえ握れば、それは間違いなくカップルの絵になるだろう。

肌と肌が与え合う体温。

寄り添う身体。

二人だけの世界。

でも。

「嘘……なんだもんね」

南さんは、そつと僕から身体を離してそう呟いた。

僕は静かに頷くと、机の上においてあった写真へと目を向ける。

高坂さんと、南さん、そして園田さんが笑顔で映っていた。

思わず手を伸ばす。僕の視界には一人しか入らない。

「……」

「……！ 南さん!？」

ぼうっと写真を眺めていると、再び南さんが肩を寄せてきた。そして、なんの躊躇いもなく僕の左腕に抱き付く。先ほどとは比べ物にならないほどの暖かさ、柔らかさと耳元にかかる吐息。

「今のことりは、写真の中の穂乃果ちゃんにも勝てないんだね」

「……」

「ズルいよ……」

ぎゅうっと、少しだけ強く抱きしめられた。

彼女の視線は僕の横顔に。

僕の視線は写真の中の想い人に。

そんな歪な光景を、インターホンの音が崩す。

「ことりちやーん、お邪魔しまーす」

「こら、穂乃果！ 勝手に入ってはダメですよ！」

僕は静かに顔を上げる。

——嘘を、つかなくちや。

されど彼の目には映らない——了

そして彼は嘘を重ねる

「穂乃果ちゃん、上がって来て良いよ！」

玄関先から懐かしい声が響き、南さんは名残惜しそうにしながらも僕の腕を離して立ち上がった。暖かかった左腕が急に冷えて、僕は静かに手に持っていた写真を机の上に戻す。この名残惜しさは南さんに対してか、それとも一枚の紙切れに対してか。

最後にもう一度それに目を向ける。

相変わらず、写真の中の彼女は誰よりも美しく輝いていた。

「はーい」

「お邪魔します」

トントンという軽妙な足音が耳朶をうち、その音が近づくほど自分の鼓動が早くなつていくのを感じた。嘘をつかねばならないという使命感と、僕にそんなこと出来るのかという不安、そして緊張感。

そして何よりも……。

そつと、南さんの方へと目を向ける。

彼女はおそらく先ほどから僕のことを気にしていてくれたのだろう、心配そうに僕の

様子を伺っていた。デート中にはほかの女の子の写真に見とれるなんて、ふざけた行為に腹も立てず、あろうことか心配まで。

ズキン。

緊張や、不安ではない。

明確な痛みが走る。

その名前は——罪悪感。

「大丈夫だよ。こつりがうまくフオローするから……」

「……」

僕はその言葉にうつむいて、強く唇を噛んだ。

本当に最低だ。今みたいな言葉をあろうことか、南さんに言わせてしまうなんて。

今この状況でつらいのは、他でもない彼女なのに。だってそうだろう？ これから彼女と僕が騙さなければいけないのは高坂さんと園田さん。つまり、南さんのかけがえのない親友二人だ。

僕が高坂さんや南さんに対して抱いている罪悪感なんて……彼女のそれに比べたら微々たるものだ。そんなこと、頭では重々承知してる、

でも。でも……。

「……ぐめんね」

「うんっ」

今の僕には、謝ることしか出来ない。

視線を落とし、拳を握りこむ僕の傍に南さんは静かに腰を下ろして優しく僕の手を取った。柔らかな感触と、暖かな想いが体温にのって伝わってくる。この子はいつたいどうしてこんな僕のことを……。

「気にしなくて良いんだよ。ことりは、あなたのためなら頑張れるから」

「なんで……」

掠れる声で呟く。

「こんな僕に、どうして君はそこまで。」

「あなたが、そういう顔をしてくれる人だから。こどりの気持ちや心を心の底から思いやっ
て、苦しんでくれる。それでも、あなたには手に入れたいものがある、それに向かっ
て一生懸命前を手を伸ばす。そんなあなただから、ことりはあなたの事が今でも好き
んだよ」

「……」

彼女の健気な好意に触れてしまい、思わず顔を上げてしまった。

目を合わせるつもりはなかったんだ。だって、今、南さんの瞳を見つめてしまうと僕は罪悪感でどうにかなくなってしまいそうだったから。もし彼女が泣いていたら、もし彼女

が寂しそうにしていたら。

なんとも身勝手な想い。

しかし。

顔を上げた先には——彼女の心からの笑顔。

僕は、その高坂さんとは別種の光を放つ表情に、思わず見とれてしまう。まるで月の光のような、優しく、そして儚げで、すべてを包み込んでくれる柔らかな光。

唐突にかなり大きめの音を立ててドアが開かれた。

いや、僕たちが思わず彼女が来ることを忘れてしまっていたただけだ。

「あー!! 久しぶりだねー!!」

まぶしい笑顔。

一瞬、僕を照らしかけた月の光は……太陽の圧倒的な光量によってかき消された。

そして、僕の視線は彼女に釘付けになる。南さんの僕の手を握る力がわずかに強くなるが、僕にはそんなことを気にしている余裕などなかった。

一か月ぶりに会った高坂さんは、南さんと同じく、いやそれ以上に魅力的になっていた。新たな出会いを経たせいも、一層輝きを増した笑顔、表情、快活な声。少し伸びた髪の毛も幼さの残る彼女に僅かばかりの色香を与え、僕の心を大きく揺さぶる。

「ごめん、南さんやっぱり僕は……」。

「久しぶり、高坂さん。元気だった？」

「うん！ もちろん！ 君は元気にしてた？」

「元気だったよ。新しい高校も楽しいし」

「そうなんだ！ 良かったね。穂乃果も音ノ木坂に行つて良かったよ」

嬉しそうに話しながら跳ねるように部屋に入ってくる。

しかし、そこで初めて南さんが僕の手を取っているのが目に入ったのだろう。一瞬、うっとした顔をして困つたように笑つた。僕と南さんは慌てて繋いでいた手を離す。

「えへへ……、もしかして穂乃果、邪魔しちゃつた？」

「そ、そんなことないよ！ ねっ!？」

「も、もちろん!？」

慌てて、弁明するが後の祭りだろう。

実際の話は別として、行為自体は完璧に恋人のそれだ。まあ、一応恋人同士なので問題は無いのだが、どうしても複雑な気持ちになる。出来れば彼女の目にこんな僕の姿を

見せたくなかった。そんな性質の悪い我儘。

当然高坂さんの表情に浮かぶのは嫉妬や妬みではなく困惑と遠慮。

「もう、だから勝手に入ってはだめだと言ったのですよ」

「う、海未ちゃん……ごめん」

「園田さん、久しぶり」

困る高坂さんの後ろから、そつと姿を現した園田さんが呆れた様子で幼馴染を諷める。ほかの二人と比べて彼女はあまり変わらないようだ。元々しっかりしていた印象もあるし、変わらず真面目にほかの二人を見守っているのだろう。

彼女は僕が話しかけると、丁寧に会釈を返してくれた。

実はあまり彼女と話したことはないのでもう少しだけ緊張する。

「お久しぶりです。卒業式以来ですね」

「うん、そうだね。園田さんは弓道を高校でも頑張ってるのかな？」

「ええ、今日も先ほどまで練習を。……ことりとのデートは楽しかったですか？」

早速来たか。

挨拶も早々に、彼女は本題を切り出した。

にわかに緊張が満ちる。高坂さんだけは若干変化した部屋の雰囲気を感じていないみたいだけれど。

園田さんの表情を見ればわかる、彼女はこの話をしにこの場所に来たのだ。現在時刻は四時半くらい。先ほどまで部活があったと言ったが、高校の部活。それも一年生時の春に四時なんて中途半端な時間に終わるはずがない。

間違はなくこの子は、部活の時間を削ってまで『僕という存在』を見極めようとしている。本当に、いい友達同士なんだろうな。親友である南さんのために彼女はここに居る。

僕が南さんにふさわしくないと感じれば、必ず彼女は牙を剥くだろう。

そう考えて、僕はそつと微笑んだ。

そんな表情の変化に園田さんはいぶかしげに首を傾げたものの、静かに僕の返事を待っている。ちらりと横を見ると、南さんが何気ない風を装いながらも僕の事を気にかけているのが視線から伝わってきた。

やっぱり駄目だ。

嘘は僕がつかなきや。

南さんに、これほどまでに親身になってくれる親友に何度も嘘をつかせるなんて出来やしない。汚れるのは……僕も一緒だ。

「うん、すごく楽しかったよ」

笑えたはずだ。

きつと、誰よりも幸せそうな笑顔で。

そしてその笑顔の裏で、また一つ、僕の罪が増えていく。

「へえー、あのお店でランチしてきたんだ。どうだった？ 美味しかった？」

「うんっ、すっごく美味しかったよ！ ね？」

「そうだね。ちよつとチーズケーキが甘かったけど」

「ええー、そこが良いんだよー」

「いいな。穂乃果も付いていけばよかったあ」

「それは流石にお邪魔ですよ」

僕たちは小さな机を囲んで談笑していた。高坂さんのお父さんが経営するほむらまんじゅうを頂きながら今日あったデートの話や、彼女たちの近況を聞いた。

園田さんは時折伺うような視線を僕に送ってきてはいるが、それほど厳しいものでは

ない。

自分で言うのもなんだが、中学校では一応真面目な生徒で通っていたため第一印象自体は悪くないのだろう。それでも彼女は相当慎重な性格なのか、まだ僕の評価付けをやる気は無い様だ。

「君はちよつと身長伸びたね!」

「そう?」

「うん! 絶対伸びてるよ、ちよつと立ってみて!」

一瞬、じいっと僕を見た高坂さんが、元氣よく立ち上がる。そして早く早く、と催促してきた。言われるままに立ち上がって、少し気恥ずかしく思いながらも同じく立ち上がり僕を待つ高坂さんと視線を合わせる。

一体何だというのだろう。

「うん! やっぱり伸びてるよ」

「穂乃果、分かるのですか?」

不思議そうに、園田さんが僕の気持ちを代弁してくれた。

もちろん成長期だから伸びてる可能性はあるけれど、立って顔を合わせるだけで分かるものだろうか? 高坂さんはなぜか自信満々に腕を組んで頷いている。

「立って向かい合った感じがちよつと違うもん。それは君の身長が伸びた証拠だよ。」

だって、穂乃果は身長伸びてないから」

「そ、そうなんだ。いや、そんなことで分かるものなの？」

「わかるよ！ 中学の頃たくさんお話してくれたからっ」

えへへ、と嬉しそうに彼女は笑う。

僕は……思わず言葉を失った。

現金なものだ。

南さんと付き合っていることを受け入れられたら辛くなり、彼女と手を繋いでも高坂さんは何とも思わないと気付かされては落ち込んでしまう。

でも、自分との思い出が彼女の中にまだ大きく残っているというその事実だけで……僕の心は舞い上がってしまった。昂る感情と、跳ねる心臓。憧れの子が学校が変わってもなお、自分の事を記憶してくれているという些細な喜び。

僕はどこまでも子供だった。

昔と違うのは、今の僕の傍らに『彼女』が居るということ。

「(、(こ)りも身長のびたかな」

「わわっ！ (こ)りちゃん？」

急に南さんが立ち上がり、高坂さんに抱き付いた。

「んー、ことりちゃんはあるまり変わってないよ？」

「そ、そつか。えへへ」

お互いの体に触れあいながら、仲睦まじく身長を比べあいつこする南さんと高坂さん。いつの間にか僕は放置されてしまっていた。

どうやら二人で楽しそうに話し始めてしまったため、僕はそつと腰を下ろす。そして食べかけのほむらまんじゅうを手にとって口に放り込んだ。優しいあんこの甘さが口いっぱい広がって高ぶっていた精神を少しだけ落ち着かせてくれる。

「ことり……？」

少しだけ嫌な予感がした。

わずかに鼓膜を揺らした囁き声につられて前を見ると、疑問符を浮かべた表情で園田さんが静かに南さんの様子を伺っている。その目に浮かぶのは戸惑いと……。

僅かな猜疑心。

「園田さん！」

「は、はい？ 何でしょう？」

僕は思わず声をあげていた。

理由はわからないが、あのまま園田さんが南さんを見つめていると何かに気付かれそうだったのだ。あくまで勘にすぎないけれど、確かな警鐘が僕の中で鳴り響いている。

そしてそういう悪い予感というのは総じてよく当たるものだ。

驚いたように僕を見る園田さんの注意を引きつける。

「園田さんは彼氏とか居ないの？」

「な、なんですか、藪から棒に……」

取り合えず声をかけてしまったせいも、うまいこと話題を作ることが出来なかった。しかし、園田さんは戸惑いながらも、僕のその唐突な問いかけに答えてくれる。南さんも高坂さんも一通り話は終わったのか、揃って座ると、園田さんへと顔を向けた。

「いないですよ、そもそも女子高ですし」

「そ、そうなんだ」

「……まさか、自分は彼女がいるぞっていう嫌味でしょうか」

「ちっ、違うよ！」

「あー、それは穂乃果たちへの宣戦布告だね？」

じろりとこちらを睨みつけてくる園田さんと、嬉しそうに話に乗つかつてくる高坂さん。注意を逸らすことには成功したものの、再びピンチになりそうだ。南さんはあははは、と困ったように笑っている。

「そもそも、貴方たちの方が異質なのですよ？」

「ホントだよ！　ことりちゃんが好きなのが居たことにも驚いたけど、まさか卒業式の

日に付き合うなんて」

「全くです。何度も言いましたがことりも、相談くらいしてくれれば良かったのに」
「ご、ごめん。だって、恥ずかしかったから……」

「君もだよ！ 穂乃果は二人共と仲が良いつもりでいたのに……汗臭いよ！」
「穂乃果、それをいうなら水くさいです」

急に怒り始めた二人の勢いに押されて少し後ずさりしてしまった。

横に視線で助けを求めると南さんが、最近二人ともいつもこうなの、とふわりとした笑顔を浮かべながら耳打ちしてくる。どうやら、三人でいる時も時折こうして詰め寄られているらしい。

それにしても。

二人共と仲が良い、か。

あくまで南さんと僕は同列。

「ねえ、ねえ！」

「どうしたの、穂乃果ちゃん？」

「ことりちゃんはこの人のどんな所が好きなの？」

「えええ〜」

高坂さんは急にその質問がひらめいたのか、天真爛漫な表情を浮かべて南さんに問い

かける。よほど気になっているのだろう、体重が完全に前の方へ傾いていた。園田さんもやはり気になるのか、一瞬高坂さんを諫めようと口を開きかけたものの、じつと南さんの顔を見つめる。

「だって、ことりちゃん。いつつもはぐらかすんだもん！ 今日くらい答えてもらおうよ！」

「そうですよ、ことり。私も気になります」

「う、海末ちゃんまで……」

ちらり、と横目で僕に助けを求める南さん。

う、どうしろと言うのだろう。

一応ボロが出る可能性があるため、できればそういう話は避けたい。

僕が何とか話題を変えようと口を開きかけたその時、観念したように南さんが話し始めた。おそらくほかの二人の性格をよく知る彼女の事だ。さすがにそろそろ話しておかねばならないと判断したのだろう。

僕は彼女の意図をくみ取って、口をつぐむ。

「二人とも、からかわないですよ？ ……あなたも」

「うん！」

「はい」

「……分かった」

南さんは少しだけ躊躇う素振りを見せた後、静かに顔を上げた。

その凜とした横顔に思わず目が行ってしまう。

「一番は……色んなことに一生懸命な所かな。いつでも何か目標をもって、それに向かって努力出来る人」

僕たちは静かに彼女の話を聞いていた。

なんというか、他の二人もなぜか急に真面目な表情に変わっていて……とてもじゃないけど茶化せる雰囲気ではない。

「あと、すっごく優しい人なんだ。……穂乃果ちゃんは知ってるでしょ？」

「……うん。優しくって、面白い人だっけ分かってるよ。だから穂乃果も二人の仲を応援しようって決めたんだ。もう、本当はことりちゃんを私と海未ちゃんのものなんだからね？」

「う、ごめん……」

なぜかぷくつと頬を膨らませ、こちらに向けて指をさしてくる。

「いいよ！ その代り、ことりちゃんを幸せにしてあげなきゃダメなんだよ？」

「……」

「どうしたの？」

「いや、分かつてるよ」

何やってる。

今のはすぐに返事を返さなきゃいけない所だろう。

俺は机の陰で強く拳を握りこんだ。

いい加減慣れろよ。

高坂さんが僕に何の興味もないっていう、その事実。

いつまでもウジウジと、彼女の一言一言に揺れ動く情けない心。

それが恋なんだって、部外者はいうだろう。それが高校一年生の初恋なんだって。若くていいね、青春しているね。もちろん、その言葉に間違いはないって思う。でも、それはあくまで普通の恋愛の話だ。

届くはずもない花に、手を伸ばす。

しかも、僕を求める女の子を足場にして。

吐き気がする。

この状況に、自分自身に。

でも、僕は再び口を開く。

「南さん……いや、こひとりさんの事は任せてよ」

諦めきれない。

だからこそ僕は嘘を重ねるんだ。

「うんっ！」

その笑顔をもっと近くで見たいから。

一瞬、ハツとした顔で南さんがこちらを見た。急に名前で呼んだせいだろうか、ほんの僅かな時間嬉しそうな顔をした。が、思い出したように表情を暗くする。しかし、すぐにいつもの柔らかな笑顔へと戻し、微笑んだ。

しかし。

その一瞬の表情の変化を、園田さんは見逃さなかつたみたいだ。

「ことり、あなたは……」

「海未ちゃん？ どうしたの？」

「い、いえ……」

だが、僕はその事に気が付かず、南さん同様きよとんと彼女を見る。

園田さんは少しだけ考える素振りを見せた後、軽く首を振った。

そして。

「それでは、次は貴方の話を聞かせてくれませんか？」

「ぼ、僕の？」

「ええ。貴方は、ことりのどんな所が好きなのです？」

ついに来たか。この質問が。

僕と南さんはアイコンタクトをかわす。

僕は思い出していた。南さんと立てた作戦。嘘な苦手な僕が、二人を騙す手段。

『ことりのことを、穂乃果ちゃんだと思って答えてくれれば上手くいくんじゃないのかな』

彼女の、哀しい提案。

本当はそんな事したくなかったけど……僕は、この気持ちをそのまま言葉にしよう。もし仮に、それが南さんを深く傷つけるとしても、それが僕たちの歩んでいくと決めた道だ。『本当』でもって『嘘』を成立させる。

……やっぱり僕は、僕の事が嫌いだ。

「僕が彼女を好きになった理由？」

「うん！ 穂乃果も気になるなあ」

高坂さん。その『彼女』は君の事なんだけどな。

僕は自嘲気味に微笑んだ。南さんは寂しそうに笑っている。

一呼吸。

園田さんは黙ってこちらの様子を伺っていた。

下手な嘘をつけば……必ず見透かされる。

もう一呼吸。

僕はそつと口を開いた。

「笑顔、かな」

「笑顔？」

高坂さんにオウム返しに問いかけられる。

そうだよ、笑顔だ。

「心から明るい笑顔を浮かべてくれるでしょ？ ……太陽みたいな」

「ふふつ、そうだね！ 穂乃果もわかるよ、その気持ち。ことりちゃんの笑い顔って可愛

いよね？」

そういつて彼女は素直に笑う。

うん。……その笑顔なんだよ、高坂さん。

「優しいところも」

親友の事を心から思いやれる君のその優しさ。

「元気なところも」

久しぶりに会った僕に、変わらず笑いかけてくれる君。

「少し抜けてる所も」

きっと、君は僕の行為に気付いてくれないだろう。

「全部」

そう、全部。

「好きなんだ」

「それじゃ、穂乃果は店番があるから先に帰るねっ」

「うん、それじゃ」

「また皆で集まろうね！」

時刻は六時を回ったあたりか。

高坂さんは家の手伝いがあったらしく、足早に南さんの家から出ていった。彼女曰く、六時に妹と交代するはずだったらしいのだが、すっかり忘れてしまっていたようだ。なんととも彼女らしい失態。

時間も時間なので、僕も園田さんもお暇することにした。

二人そろって立ち上がり、玄関まで歩く。

「それでは、ことり、お邪魔しました。貴方もまた……」

「うん、バイバイ海未ちゃん」

園田さんは言うが早いのか、すぐに玄関のドアを開けて外へと歩いていった。どうせなら家まで送ろうと思っていたんだけど……近所だから大丈夫だろうか。僕はそう判断して、玄関先に腰を下ろし、ゆっくりと靴紐を結ぶ。

ふわり。

急に、首筋に柔らかな感触。

同時に肩の上から腕を回され、後ろから優しく抱きしめられる。背中に伝わる暖かな

体温と微かな吐息。優しい香りに、肌と肌の触れ合いを通して伝わってくる僅かな震え。

「南さん……」

「名前で、呼んでくれるんじゃないの……？」

「……ことりさん」

「うんっ……」

「ごめん」

「いいよ。分かった事だもん。それに、辛いのはあなたも同じなんだから」

そういうと、彼女はゆっくりと離れていった。

僕はそれを合図に立ち上がる。

「それじゃ、また」

「うん。バイバイ」

また。……か。

きつと、これから何度もこういうことがあるのだろう。

嘘を嘘で塗り固めていく未来。

僕らはまた、嘘をつく。

僕は静かにドアを閉めた。

「すみません。少しお話があるのですが」
「園田さん……」

僕は、また……。

そして彼は嘘を重ねる——了

ゆえに彼等は戻れない

「すみません、少しお話があるのですが」

南さんの家を出てすぐ。

玄関先を左へと曲がった先に彼女は立っていた。

——ああ。まずい。

僕は心の中で小さく呟く。

「園田さん……」

戸惑いとも、怯えとも取れる声が零れた。

……なんて情けない。

話しかけてきたのは先ほど帰ったはずの同級生。彼女は明らかな猜疑心を浮かべた表情で僕を見つめている。良くない話を持ち掛けてくるであろうことなど、容易に想像できた。

——何がいけなかったのだろう。

僕は、ついてきてください、と一言残して前を先導するように歩き始めた彼女の背中を追いながら考える。

気が付かない内にボロが出てしまったのだろうか。

それとも、ただ色々僕に聞きたいことがあったから待っていたのだろうか。

……いや、後者で無い事は間違いない。

聴く、そして厳しい彼女の事だ。本当に聞きたいことが今までにあつたのなら既にコ
ンタクトを取つて来ている筈。このタイミングで僕を呼び止める理由など、園田さん
の中で僕と南さんの関係に疑問が生じたから意外に考えられない。

——何がいけなかつたのだろうか。

再び問いかける。

僕自身、演技は出来ていたはずだ。

なぜなら嘘は言っていないから。

南さんの目の前で、高坂さんへの想いを語り、それをあたかも偽りの彼女への行為で
あるかのようにすり替えて。彼女を傷つける事を分かつて、そして本当に好きな人に嘘
をついてしまう事も理解したうえで僕はあの行動を選択した。

その時は園田さんも静かに聞いていてくれたように思う。

だとしたら……、南さんが原因だろう。

僕の間から見れば終ぞ平静を装つてはいたが、幼馴染の園田さんだからこそ見える何
かがあつたのかもしれない。

小さく溜息を一つ。

……別に、南さんが悪いわけでは無い。

何がいけなかったのかだつて？

そんなこと、解り切っているさ。

僕がこうして今、南さんの彼氏としてここに立っている。

全てはそこから始まった。

間違いや失敗を探すのならば、きっとそれだけだろう。

でも今更、細かい反省なんてするつもりも無い。

僕がすべきこと。

選択肢など残されてなんかいないんだ。

たった一つ。——南さんの居ないこの場所で、彼女の親友を騙すだけ。

僕は案内されるがままに近くの公園へと足を踏み入れる。それは、ことりさんの家と高坂さんの家の丁度半分くらいの場所に位置していた。

ザツザツ。

言葉を発しない二人の間に、砂を踏みしめる音が不快なほど強く耳朵を打つ。

心地よいはずの夕方に吹く初夏の風は僅かに浮かぶ冷や汗を乾かすだけですぐに通り過ぎていく。

「単刀直入に聞きます」

園田さんは振り返るなり、そう切り出した。

有無を言わさぬ様子で、まっすぐに僕を見つめてくる。

「ことりとは、本当に付き合っているのですか？」

そして訪れる無音。

さらさらと夏に向けて一生懸命に背を伸ばす草木が揺れる。

容赦のない問いかけ。

真実のみを求める真摯な瞳。

「……」

「失礼な事を聞いていることは自分でも良く分かっていきます。でも、どうしても聞いておかなければいけない気がして」

少しだけ、園田さんの声のトーンが落ちた。

クラスが一緒だっただけのさほど仲の良い男。しかも、友人の彼氏をいきなり引き留めて、疑いの言葉をかける。その行為は世間的に見ると許されたものではない。そして彼女は礼儀作法を強く弁えている人間だ。一步引いてしまうのも無理はない。

しかし、僕はそれとは全く別の事を考えていた。

——なるほど。これなら。

僕は内心で頷く。

どうやら彼女には、疑いこそあれ、それが確信に変わってはいないようだ。

僅かに声色に滲んだ申し訳なさを、僕は正確に聞き分ける。

だとしたら。

だとしたら、僕にだって彼女を騙せる。

黒く汚い、下劣な思考。

僕は、僕の為だけに彼女を騙し。

嘘が再び嘘を呼ぶ。

「あたりまえだよ。僕はことりさんの事が本当に好きだから」

自分でも驚くくらいスムーズにその言葉は口をついて出てきた。

——慣れ始めているのだ、心にもない言葉を紡ぐ行為そのものに。

僕はその事実が気が付く。そして、どうしようもなくやるせない気持ちに駆られながらも、笑顔を浮かべて見せた。高坂さんと仲良くなりたくて一生懸命身に着けた、人と話す時の姿勢。笑顔や声色や、相手の表情を伺う技術。

それは皮肉な事に、全て……今の自分の力になっている。

「そう、なのですか」

幾分か、園田さんの表情から不信感が抜け落ちるのが見て取れた。

「嘘は言っていないませんよね？」

「……もちろん」

「そうですか」

幸いな事に、僕の嘘が見抜けるほど、彼女は僕の事を知らない。

園田さんはしばらく僕を見つめた後、ふう、と小さく、一つ息を吐き出した。

僕は、努めて冷静に問いかける。

「どうしてそんなことを？」

「いえ……、少しことりの様子が気になったものですから」

「ことりさんの様子が？」

「はい」

もちろん、名前で呼ぶことも忘れない。

そして、『予想外の問いかけをされた彼氏』の態度も崩さない。

「どうかしたの？ もしかして、僕が何か……」

「いえ、そうではないのですが」

「……」

「少し、ことりの表情が暗くなる瞬間があります。勿論、今日も」

「暗く……？」

「やっぱり。」

園田さんは、僕と南さんの歪な関係を幼馴染の顔色一つで察している。

そして、おそらく感覚も一つの大きな要素ではあると思う。……が、何より、

「はい。ことりは少し自分一人で溜め込んでしまう所があるので」

彼女が自身の幼馴染の性格を熟知しているという点にある。

園田さん自身の友人を憂う優しい性格と、今述べた性質が相まって、たった数十分の会話だけでここまで辿り着いたのだろう。

僕はそんな二人。いや、三人の関係を羨ましく思う。

と、同時に強烈な罪悪感にも襲われた。

そこまで固く、強い絆で結ばれていた三人の関係を壊しかねない事を、僕はしているんだ。

次第に自覚していく僕の決断の弊害。

被害を被るのは何も、南さんだけではない。目の前に立つこの娘だって、大きな影響を受けるかもしれないんだ。何も知らず、ただ純粹に幼馴染の幸せだけを願って思いやりを見せる園田さん。そんな彼女に対して南さんは嘘をついてる。

それがどれだけ異常な事態かって事くらい、僕にだって分かるさ。

——傷つくのは僕と南さん。共犯者同士仲良く二人だけ。……なんて都合の良い稚拙な思考。

「どうかしましたか?」

どうやら表情に出てしまっていたようだ。

少し心配そうに、僅かに疑いの念を込めて問いかけられる。

「……えっと」

「やっぱり、何かあるのですか?」

「いや……僕、彼氏なのにごとりのさんのこと何も分かってあげれてないなって思つてさ」

一瞬、彼女は驚いた顔をして——にごりと笑つた。

優しく、安心したようなほころぶ笑顔。

「本当ですよ。貴方はごとりの彼氏なのですから、分かってあげなくては」

僕はそつと彼女と目を合わせる。

不思議と、瞳の奥に揺らめいていた疑いの炎は消えかかっていた。

なぜだろう?」

しかし、その疑問はすぐに拭い去られることになる。

「ごとりの態度が気にかかるのは本当ですし、おそらく気のせいではないと思います」

「……園田さんが言うならそうなのかもしれないね」

そして、と彼女は話し続けた。

「その態度の原因が、貴方であることも間違いないと私は思っています」

ハッキリと言われてしまった。

流石だね……。その通りだよ、園田さん。

僕は静かに彼女の視線を受け止める。

言葉は発さない。……だって、紡ぎようがないから。

——静寂。

「でも……」

一歩、彼女は僕に歩み寄ってきた。

「ことりが、貴方を本気で好きでいることは疑っていません」

曇りない瞳。

湛えられた、自分の親友に対する全幅の信頼。

「私と穂乃果とことりは小さいころからずっと一緒に居ましたから、お互いが考えてることは良く分かるんです。だから、あの子が貴方に向ける気持ちは本物だと、私達にはハッキリ伝わってきました。詳しい話はなかなか教えてくれないのですが……」

少し拗ねる様な口調で彼女は言う。

「本当は全部話して欲しいです。けど、それはワガママというものですよね」

「……友達でも、言えない事ってあるのかもじゃないよ」

「はい。それに私はまだ恋愛というものを知りませんから……もしかしたら、男の人と付き合うというのは楽しい事ばかりではなく、ことりのように時折暗い表情を浮かべてしまうようなものなのかもしれません」

そう言い切つて、彼女は再び笑顔を浮かべた。

——『自分は恋を知らないから、そういうこともあるのかもしれない』

園田さんはその言葉で自身を納得させたようだ。

……いや、少し違うかな。

きつと、未だに完璧に納得は出来ていない。どうして自分に何も話してくれないのか。そんな気持ちが燻つているとは思う。

——でも、親友だから。

親友が目の前の方の男の事を本気で好いていることは事実。だとしたら、それを全力で応援してあげるべきなのではないか。たしかに、少し気がかりな点もあるけれど、それは

まだまだ未熟な自分の取り越し苦労なのかもしれない。

そんなどちらにも傾きかねない危うい考え。

しかし、園田さんを『僕たちを信じる』方へ倒した理由がある。

「貴方は信頼に足る男性だと、私は思っていますから」

そう言つて、はにかむように微笑む。

——狼少年の話を知らない人はいないだろう。

普段から嘘を吐く人間は、信用の置けないものとしてそのようなレッテルを張られてしまう。嘘つきにはアイツは本当のことを言わないという汚名をが否応なく背負わされ、それを取り払うことは出来ない。

そして、それは逆もまた然り。

誠実さとは不思議と伝わる。信頼される人間とそうでない人間は明確に差別化され、その噂や評価は広がっていくものだ。

「貴方が、優しく、そして誠実な男性であることはよくことりや穂乃果から聞かされていきましたから」

僕は、そういう人間として認識されている。

別に演技をしてきた訳じゃない。

ただただ純粹に、太陽に近づきたくて。だからこそ、もっと輝きたくて。

高坂さんの目に留まるくらい。彼女が僕に憧れるくらい魅力的な人間になりたい！

中学時代の僕はその一心で色んな事を頑張ってきた。

だからこそ、きつと南さんは僕の事を見つけたのだと思うし、そして。

——幸か不幸か。その努力はこの瞬間『園田さんの僕自身への信頼』として顔を覗かせた。

一つの見方をすれば、……幸せなのかもしれない。

僕や南さんは自分の目的に一步近づける。園田さんだって幼馴染を疑うという本当はしたくない行動から遠ざかることが出来る。一見、波風立たない結果へと結びついてるように見えなくてもいい。

でも、別の見方をすれば一転。……不幸になる。

好きな人のために培ってきた信頼は、今やその想い人のために吐く嘘を覆い隠す蓑となつた。

皮肉なものだよ。輝きたくて懸命に身につけてきた評価や力そのまま、汚くよご

れゆく僕を助けてくれている。魅力的な衣の裏で、着々と腐りゆく身体。そしてそれを理解しても尚、忘れられない想いと憧れ。

もし仮に、僕に信頼に足る何かがついていなかったとすれば、園田さんに止めて貰えたかもしれない。もしかしたら邪魔して貰えたかも。そんな選択間違っていると、教えて貰うことだって出来たのかもしれない。

だけど。

「ですから、私はしばらくは静かに見守っていきましょうと思います。ことりのこと、頼みましたよ？」

——結局僕は彼女を騙しきってしまった。

また一步、先へと進める。前へ。前へ。

未だ答えの見つからない暗い道。

答えがあるのかもわからないその未来。

それでも僕は……

「うん。任せてよ」

嘘を吐く。

「呼び止めてしまつてすみません」

「いや、別に良いよ。むしろありがとう」

「いえ、お礼なんて……。でも、貴方とこうして話せて良かったです」

「僕もだよ。また何かあつたら遠慮なく言つてきてね？」

「はい。それでは失礼します」

園田さんは申し訳無きそうに礼儀正しく頭を下げる。そしてその後、幾分かスツキリとした表情で帰つて行つた。僅かにちくりと胸が痛むが、残念ながらもうそんな痛みなどどうに慣れてしまつてゐる。

僕は軽く拳を握りこみ、何度か頭を振つた。

——これでいいんだ。これが僕らの選んだ道なんだ。

自分に言い聞かせる。

そして。

「これで良かった。そうだろうか？ ……南さん」

園田さんが帰って行った方向とは逆。

彼女の死角となっていた塀の向こうに——彼女は居た。

「……うん」

小さく——響く。

「やっぱり、来てたんだ」

「……」

ゆっくりと、彼女は僕の元に歩いてきた。

視線は足元に向けられてその表情は伺えない。

「どうしてここに？」

問いかける。答えなど分かっている筈なのに。

南さんは俯いたまま、僅かに震える声で返事した。

「海未ちゃんがことりの違和感に気が付いちやつた事くらい、分かるもん。……ずっと一緒に居たんだから」

園田さんが彼女の事を理解しているのと同じく、彼女もまた、園田さんの事を深く理解していた。きつと幼馴染という関係は一方通行ではなく、相互の理解で成り立っている。だからこそ南さんは自身の親友の猜疑心に気が付いて、僕たちの事を追って来たんだ。

追いついて、何をしようとしていたのかは分からない。

僕と一緒に嘘を並べようとしていたのか。

それとも、本当のことを話そうとしたのか。

今となつては知る由もない。

「ことりは……」

「うん」

「今のことりは、貴方の彼女だよね？」

「……うん」

「だったら、抱き着いても……良いよね？」

「……」

彼女は全部聞いてしまったのだ。

そして、知ってしまった。

園田さんが自分の事を一生懸命考えているからこそ、僕を呼び止めたのだという事実に。

……いや。そんなこと、彼女たちの事だ、お互い理解し合っているに違いない。

本当に大事なものは、園田さんが南さんと僕を心から信じて疑うのを辞めたという結果。

——つまり。

自分が親友を騙し、そして……これからも嘘を重ねなくてはならなくなったという現実。

僕には、彼女の胸中を全て伺い知ることが出来ないだろう。ただ、確かな事が一つだけ。

——僕らはもう、立ち止まれない。

ゆえに彼等は戻れない——了

しかして彼は壊れゆく

コツコツ。

革靴がコンクリートを叩き、夕焼け空に固い音が溶けていく。

一歩、一歩。少しだけ重い足取り。

僕は目的地向けて歩みを進めていた。

南さんとのデートの度に通る、通い慣れた道。

園田さんに僕達の関係を疑われたあの日から丁度一ヶ月が経過していた。梅雨入りしてばかりの、じつとりとした空気が少し不快で。一応持つて行きなさい、と持たされた折り畳み傘は余計にスクールバックを膨らませ、スペースを圧迫する。

あれから僕達は何度かデートを重ねていた。

皆と同じようにシヨッピングをして。

皆と同じように少しお洒落なレストランに行つて。

皆と同じように遊園地に行つて。

皆と同じように手を繋ぎ。

皆と同じように彼女を家まで送る。

一つだけ違うのは、二人の心の距離。

一生懸命僕の心に近づこうと微笑みかけてくれる彼女と、変わらず閉じた僕の意味。

——どうして僕なんかを？　僕なんか、嫌いになったほうが良いよ。

何度問いかけただろうか。

家の前で別れる度、目に涙を浮かべて手を振ってくれる南さん。

楽しかったよ。また行こうね？

そう言ってくれる僕の《嘘の》彼女。

掛け値無しに良い娘だと思うんだ。僕なんかには勿体無い。高坂さんのような明るく皆を照らしだす太陽ではないけれど、柔らかく、いつの間にか傍に寄り添ってくれている月の光のような女の娘。

『こころは知ってるから、貴方の素敵な所』

そう言って、笑ってくれる。

——なんで？

——どうして？

自問自答。

僕には分からない。

なぜなら、僕は変わってしまったのだ。そのことが自分だからこそよく分かる。

彼女が好きだった僕はもう居ない。

この関係を築く前は、自分を磨くことに一生懸命になっていた。高坂さんの隣に立ちたくて、懸命に出来る限りの事をしてきた。

それは、前向きな努力。

明るい未来を目指して、その足で前へと進む行為。

きつと、南さんはそんな僕を好きになってくれたんだろう。

でも、今は違う。

……僕は前に進んでいない。

努力で得た力を嘘を補強する力へ変えた。南さんが好きでいてくれた僕という殻を身に纏い、その中でだんだんと腐りゆく身体。腐臭は外へ漏れ出ることに無く己の鼻先で燻り嫌悪感を自分自身に抱かせる。

僕は立ち止まってしまった。

高坂さんに追いつくんじやない。

なんとか自分の元まで引きずり降ろそうと画策する——汚れた思考、擦れた手法。

僕は僕が嫌いだ。

嫌いで嫌いで堪らない。

僅かに残る良心が叫ぶ。

——こんなこともう止めろ、これが本当にお前が求めたものなのか？

何度も何度も繰り返された問答。だまれ、だまれ。

その度に強く拳を握りこみ、唇を噛む。血管が浮き出し不自然に染まる掌、口の端に滲む血の色。止めろだつて？ ふざけたことを。僕はもう戻れない。僕たちはもう、引き返せない！

やり方が間違つていようが、その結果が求めていたものと違おうが関係ない。

僕たちはもう踏み出してしまったんだ、この足を。

二人共、底なしの沼地に両足を深く突っ込んでしまった。もう、後戻りは出来ない。がむしやらに、沈み込みそうになりながら、それでも進む先に新たな岸があると信じて藻掻くしか無いんだよ。

じゃないと、今までしてきた身を削る行為が全て無駄になる。

僕は歩みを止めないよ。

例えその過程で南さんが不幸になろうとも。……僕は高坂さんが好きだから。それしか、無いから。

——だつて。

僕は自分に言い聞かせる。

だつて、嘘の彼女の幸せなんて、僕の知った事じゃない！

あの娘だつて僕と同じ穴のムジナだ。

覚悟はできてるはずだ！ 親友に嘘を吐いてまで、この関係が続けることを選んだ。

そうまでして、僕が自分に靡かない事を知つて尚、僕のそばにいる。

僕のせいじゃない。

これは、僕達共犯者二人の責任だ。

何度も何度も繰り返した言い訳。

それでもしないと……僕は壊れてしまひそうで。

「……………めん、南さん」

小さく呟く。

本当は分かっている。

彼女は僕とは違う。純粹で、綺麗なままの共犯者——いや、被害者だ。

同じじゃない。汚れてるのは僕。

汚したのは……僕だ。

それでも僕は——高坂さんが欲しい。

暗い目で僕は前を向く。

間違いを自覚して、それでもこの足を踏み出す。

ただただ、太陽に焦がれて。

それが恋と呼べるものなのか、僕にはもう分からなかった。

ガラガラ。

少し古びた、それでいてよく手入れされているらしい木製の引き戸が小気味良い音と共に開く。同時に店内に流れ込む風と、揺れる暖簾。大きく書かれた『穂むら』の三文字。

「いらつしやいませー！」

すぐに可憐な声が響いた。

和菓子 の 並ぶ ショーウィンドウ の 向こう には 中学生 位の 可愛らしい 女の子 が 立っている。

少し釣り目がちな目と短めの髪。珍しい男子高校生の客に興味を惹かれたのか、特に臆すること無くこちらに視線を向けてきた。案外物怖じしない性格なのかもしれない。目が合うとお辞儀を返してくれたあたり、礼儀正しい娘だとは思うけど。

……あんまり、高坂さんとは似てないな。

そんなことを考えながら僕はゆつくりと彼女に近づいた。

「えっと、はじめまして。高坂……雪穂さん、だよね？」

「あつ、はい。そうですけど……」

「高坂さん……つと、あはは。君も高坂さんだから……そうだね、君のお姉さんの知り合いないんだ」

出来るだけ柔らかな表情で話しかける。

ゆつたりとした態度、そして柔らかい口調。

「ああ、なるほど。はじめまして！ お姉ちゃんなら確かさつき」

雪穂さんは高坂さんの妹らしく元気良く挨拶を返してくれた。

そして彼女は欠片の警戒心を抱くこと無く、自身の姉を探し始める。

やっぱり。僕の身につけた表情や口調や雰囲気は初対面の年下の女の子に対しても効果てきめんらしい。

「あ、別と呼ばなくていいよ？ 少し近くまで来たから寄つただけだから」

止めるような仕草で僕は言う。

これは半分本当。そして半分嘘。

別に会えなくても良い。……僕が来たことが伝わればそれで。だから前半は本当。

でも、それは偶然ではない。だから後半は嘘。

なぜ、僕がここまで——高坂さんの家にまで来たか。

僕は……焦ってるんだ。

それが未だ何の進展も無いことからくる焦燥感なのか、それとも強く僕の心に襲いかかる罪悪感から……冷静さを失っているのか。今の僕には判断がつかない。

でもそんな落ち着かない心持ちのまま、僕は行動を起こしていた。

このまま何もせずただただ南さんの好意だけを身に受けていると、どこかおかしくなりそうで……。

僕の中の何かが……壊れてしまいそうで。

「そうですか？ でも、お姉ちゃんさつき帰ってきましたよ。今日は私が店番だけど、そろそろ閉店時間だし片付けくらいは手伝いに……」

雪穂ちゃんが親切にも俺を引き留めようとしてくれたその時。

「あれ？ どうしたの？」

一瞬、僕の時間が止まる。

そして、高坂さんが現れた。

真っ白いエプロンを着崩して彼女は荷物を運んでいる。

「……高坂さん。こんばんは」

「こんばんは！ どうしたの？ 学校帰りかな。穂乃果も丁度さつき帰ってきたんだ！

君が穂むらにに来てくれるのは初めて……だよねっ。あ、ちよっと待ってね、これ運ん

じゃわなきや」

「もう、お姉ちゃんつたら。騒がしいよ？」

「えへへ、ごめんユツキー」

彼女は照れたように笑う。

どうしようもなく、胸が騒ぐ。

変わらず魅力的な表情。輝く瞳。

会う度に引き込まれる。会う度に、暗い覚悟を新たにさせられる。

——きつと、この娘が全ての元凶だ。

少し幼さが残る言動も、それとはアンバランスに匂い立つ女性としての魅力も。

そのどれもが愛おしく、同時に憎らしく。そして、僕は彼女のなにかも独り占めしたくなる。

身の回りの人間全てに別け隔てなく与える、彼女の光。

僕は、それが欲しい。

僕だけに向いて欲しい。

近づくとも焦がされてしまうことを理解して尚、傍にいたいと願ってしまう魔性の魅力。それに焼かれる虫けらのような自分。

「ちよつと近くまで来たから寄つただけだよ。ここ、高坂さんの家だつて聞いたから」「そうなんだ。よ、いしよつと」

彼女は荷物を指定の場所に置くと、にこりと笑いながら駆け寄つてきてくれた。下から覗き込むように僕の目を真つ直ぐに見てくれる。いつもと同じ、その仕草。

汚い僕も、腐つた僕も。

彼女の瞳に写つた姿なら、もしかしたら好きになれるんじゃないかつて。

そんな事を思いながら目を合わせる。彼女の見透かすような鋭さのない、包み込むような柔らかい視線。

「一ヶ月ぶり、くらいだね？」

「うん、そうだね。……元気だった？ 最近は雨も多いけど」

「大丈夫だよ！ 雨の日は普段より早く家を出なきゃだから大変だけど……。海未ちゃん朝練の日はゆつくり寝られるから！」

「あ、それ園田さんに伝えておこうかな」

「わー！ ダメだよー！ 君だから話してるのに！」

僕の冗談に可愛らしく乗っかってくれる高坂さん。

本当に慌ててるのかな？ 両手をぶんぶんと振って抗議してくる。

「冗談だよ。僕はチャリ通だからカッパなんだよ。学校指定されたものだからすつごくださくつて……近隣の学校からはストレッチマンって言われてるんだ」

「あははつ。本当にそんなカッパなの？」

「今度見せてあげるよ」

「ホント？ 見せて見せて」

「そのためには高坂さん早起きしなきゃだけど」

「わ。それは大変だ」

弾む会話。

自然に浮かぶ笑顔。

どちらともなく零す笑い声。

久しぶりの、二人きりの時間を楽しむ。

「あの一？」

仲睦まじい僕達の様子を不思議に思ったのだろう。雪穂さんが声を掛けてきた。あらぬ疑いを持っているのかいたはずらっぽく笑っている。

「おねーちゃん。楽しそうだね。彼氏さんかな？」

「ゆ、ユツキー!? ち、違うよー。中学校のお友達で」

「へーえ。今でも会いに来てくれるんだ。幸せものだねー」

微笑ましい姉妹のやり取りを見守った。

どうやら、高坂家は妹の方がヒエラルキー的に上位に属しているらしい。二つ下の妹にからかわれて慌てる高坂さんを見ていると自然に表情が緩む。本当に天真爛漫な女の娘だ。

「そうじゃなくて……ことりちゃん、の彼氏さんなの」

告げられる事实に、僕の身体がこの期に及んで凍りつく。

こればかりはきつと……慣れるものじゃないんだろうな。

今の台詞が高坂さんの口から出る瞬間。それが一番辛い。

「ええ……?!?」

「こらっ、ユツキー。静かにしなさい!」

文字通り飛び上がって驚いていた雪穂さんは慌てて僕のもとに駆け寄ってくる。

姉とは正反対にクールなイメージが出来つつあったため少しだけ面食らってしまった。どうやら血は争えないらしい。

「こ、ことりさんの?」

「う、うん。まあね」

「へー。さすがことりさん、趣味いいなあ」

彼女は値踏みするように僕を見てふんふんと頷いてみせた。

どうやらお眼鏡に叶ったらしい。

「チャラく無さそうだし、カッコいいし、優しそうだし……」

「そ、そんなこと無いよ」

「少し気弱な所もプラスですね!」

「あ、あはは、光栄だなー」

「どこでどんな風に出会ったんですか? もう、ことりさんも教えてえくれればいいのに!」

流石に手放しにそう褒められると照れくさくなってしまふ。

僕は緩んだ頬が若干赤くなるのを感じて二・三步後ろに下がってしまった。

確かに、オシヤレに気を使い始めてから多少は見れる姿になったとは思うけど、僕は高坂さんしか見てなかったから……あまり他の女の子の意見を気にしたことはない。

そもそも、彼女意外と深く関わろうとは思わないし。

チャラそうではないと言われたが、周りの女の子に興味は一切いかないという点では

あっているのかも。……優しいって言うのは間違っただけだね。

「もう、ユツキー。あんまり根掘り葉掘り聞いちやダメだよ?」

「分かつてるよー」

「それに、君も、ことりちゃんがいるんだからユツキーに照れちやだめ!」

少しだけムスツとした表情で彼女は僕に人差し指を向けた。

流石にもうこのくらいのことと胸は疼かない。僕は曖昧な微笑みを返すだけに留める。

「そうだ、お姉ちゃん。折角だし上がって行つて貰つたら?」

「へっ?」

「ことりさんの彼氏さんと私だつて仲良くなりたくないもん。店番終わったらお姉ちゃんの部屋に行くから」

予想外の展開に僕は呆気にとられていると、僕の意味とは関係ない所で話が進んでいった。

「ゆ、ユツキー。流石にそれは……」

「まあ、付き合つてもない男女がお互いの部屋で遊ぶのはダメだけど、ことりさんの彼氏さんなら大丈夫でしょ」

「そうかなー。うーん。そう言われたらそうかもっ」

——ちよつと待つて。それは……。

反射的に喉まで出かかった言葉を飲み込んで僕は考える。

本当に止めるべきか？

何のために僕はここに来た？

それは、高坂さんに会いに来たという形を残すため。少しでも、高坂さんに僕の存在を認識して貰うため。一言二言でも話せたなら儲けものだ。そう考えてここに来たはずだ。

だとしたら、この状況は千載一遇のチャンス。

高坂さんとの距離を詰める願ってもない機会だ。

「君はこれから用事とかないのかな？」

問いかけられる。

もちろん僕の返答は決まっていた。

「うん。僕も高坂さんと久しぶりに話がしたいな」

「ごっこだよ。どうぞ！ えへへ、あんまり綺麗じゃないけど……」

照れたように笑いながら彼女が誘導してくれた先は自分の部屋。

当然来るのは初めてで、なぜか落ち着かずには辺りを見回す。やはり南さんのそれとは随分趣が違うようだ。

あまり物が多くなく、裁縫道具や化粧品類の類が綺麗に整理整頓されている僕の『彼女』の自室とは全く逆。全体的に明るい色でカーペット等統一されており、本棚には沢山の漫画がすこしまばらに置かれている。

片付いていないわけではないけれど、どこか雑多な印象を受ける高坂さんらしい部屋だ。

「ホントだ。散らかってるね」

「もう。そこは綺麗だよって言うところだよ」

「あはは。ごめんごめん」

「むう。ことりちゃんの彼氏だからって怒る時は怒るんだからね？ はい。クツシヨ

ン

「心得ておくよ。ありがとう」

つん。と可愛らしく拗ねて見せながら彼女は僕の正面に腰を下ろした。

掛けていたエプロンは下に置いてきたのか、ゆつたりとしたTシャツに七分丈のパンツといったボーイッシュな格好に変わっていた。恐らく彼女の部屋着なのだろう、所々僅かに糸のほつれが見えた。

袖口から覗く二の腕が眩しい。

不意に走る邪な妄想。

あの躰が僕のものになつたら――。

そして、同時に襲い来る自己嫌悪。

何度も繰り返した妄想をあらうことか彼女の前でするなんて。

一体、僕はどうしてしまったんだろう。

「……ね。どうかしたっ?」

「へ?」

「穂乃果のこと見てたから、どうかしたのになつて。も、もしかして服にお餅とかくっついてる? うわあ、あれちゃんと取っておかないとすぐ固まっちゃうんだよ」

う。流石に凝視しすぎたかな。

僕は慌てて顔をそむける。

とはいえ、好きな娘の部屋に、本人と二人きりなのだ。どうしても視線はそちらに行ってしまうし、奪われもする。何も考えるなという方が無理な話だろう。

「ち、違うよ。ただ……」

「……………?」

僕はなんと返したものと逡巡する。
すると。

きよとん、とした表情で彼女は首を傾げてみせた。

あどけないその表情。

警戒心の欠片もない素直な仕草。

さつきと同じ。

いつもと同じ。

……これからも同じ。

見慣れた表情。

「な……、そ……」

「え？」

僕の口から声にならない声が漏れる。

——なんだ、それ。

僕の中にドス黒い感情が渦巻いた。

どうしてこの娘はこの状況で尚、そんな顔が出来るのだろうか？ 男と二人きりで密

室にいて、なぜ無警戒で要られる？ 自分の身体をジロジロと見られてたんだぞ？ な

ぜ気が付かない？

それほどもでに、僕は眼中に無いのか。

突然湧き上がる感情。

僕はその時、なぜだか凄く——腹が立ったんだ。
だから、僕は紡ぐ。

「高坂さんに、見惚れてたんだ」

彼女を困らせる言葉を。

その顔を、何としてでも変えたくて。

「え……？」

ぼつりと零れる声。

初めて、彼女の表情が固まった。嫌悪感でも拒絶の意思でもない。単純な疑問の色。
今、なんて言われたんだろう。聞き間違いかな。それとも、冗談？

正直な彼女だからこそ心の声は伝わってくる。

僕は声色や表情の変化から相手の気持ちを読み取れる。間違いない。

だから僕は、畳み掛けた。

今までしてこなかった直接的なアプローチ。

その顔を、僕だけが知るそれに変えたくて僕は言葉を紡ぐ。

——今、南ことり邪魔者はいない。

「高坂さん、凄く可愛くなつたから」

にこり、浮かべる笑顔。

僕の技術。

「え……、あ、あはは……そうかな？」

「あ、ごめん……。びつくりさせちやつたかな……」

「えへへ、ちよつと……。でも、嬉しいな」

高坂さんは困つたように、それでいて少し嬉しそうに笑つた。頬は僅かに染まり、視線は泳ぐ。

僕は、彼女の中で今、どんな存在として認識されているのだろう。

そう、考えてみたことがある。

僕はきつと彼女にとって本当に大切な友人の中の一人だ。

僕は中学三年の時彼女と同じクラスになって、何度も何度も会話をした。その度に自分の事を伝えて、高坂さんの事を知つて、お互いに互いを理解し合つたはずだ。その時

間の積み重ねは無駄ではなかったと、そう思いたい。

僕らの関係は『友達』だった。

でも、南さんと交わした約束によってその関係は変わる。

本来なら卒業式の日僕との関係は『友達』から『親友の彼氏』に変化したはずだ。

しかし、彼女は僕へと接する態度を変えなかった。

この前は隣に南さんがいたせいで、少し距離感が掴めず困惑していたけれど、今日みたいに二人のときは前と同じように接してくれる。

そこから分かることは一つ。

——きっと、彼女の中で僕との関係は変わっていない。

今でも仲の良い『友達』のまま。

それは彼女が幼いからなのだろう。

男女の関係というものを、深く考えたことがないに違いない。

だからこそ、僕は踏み込む。

卑怯だつて言われても構わない。

もう、なりふり構ってなんか居られない！

全部失うか、彼女を手に入れるのか。二つに一つだ。

「なんだか、高坂さんと二人きりだと緊張するよ」

僕は本当の気持ちを利用して嘘をつく。

真実でもって虚を生む。

僕が彼女に抱く想いは本物だ。でも、今の言葉は汚い僕が紡ぐ嘘。それでも、声というものは発した人間の感情を相手へと伝える媒体で。

僕の偽り無い心は素直に彼女へと届くだろう。

「そ、そう？ どうしてだろうね？ あ、あはは」

朱を浮かべながら高坂さんは笑った。

どう反応して良いのか分からないかのように無意味にクッションを抱き、ぎゅうと握りこむ。

僕は強い手応えを感じていた。

そろそろ……これくらいにしておいた方が良いか。

その表情をみて僕はやっと溜飲がさがり、冷静な思考へと戻る。

「それにしても、色んな漫画があるんだね」

「う、うん！ ユツキー……雪穂のも一緒に入れてる本棚だけどね」

「へえ。少年漫画とかもあるんだ」

「そうだよ！ そういえば前、持ってる漫画の話したよね。君も全巻揃えてるんだっ

たっけ？」

「うん。面白いよね」

いつもの話へと戻す。

すると、彼女も次第にいつものペースに戻って行った。

——五分。

今までと同じ漫画の話。

——十分。

今までと同じ友達の話。

——十五分。

今までと同じ家族の話、

「あはは！ やっぱり君と話すのは楽しいね」

僕は静かに頷いた。今日はこれでいい。

今日はこれで……。
しかし。

——二十分。

今までと違う、南さんの話。

彼女は何気なく零す。

会話の流れなんて覚えちゃいない。

何時もの通り高坂さんの出してくれた話題を面白く返していただけたら。そして彼女も、いつもの様に自然に相槌を打っただけだろう。そして

しかし、そのセリフがマズかった。

「ふふっ。面白いなつ。——ことりちゃんが羨ましい」

僕のその言葉に対する反応は絶句だった。

「それは……」

僕はゆっくりと前に体重を移す。小さな机を一つ挟んだ先に高坂さんの顔。僕は少しだけ強く、彼女の手を握った。華奢で、柔らかく、そして温かい手。

「それはどういう意味？」

一気に脳内が沸騰し、冷静な判断を失う。

捉えようによつては大きく意味が変わる言葉を紡がれて、僕は冷静さを失っていた。自制は聞かない。それほどまでに僕の問題は追い詰められていたし、同時に余裕もなくなっていた。

無意識であろうとなかろうと、彼女が紡いだ言葉は僕の肯定だ。

僕を彼氏とした南さんを羨む内容。

——それはつまり。

「い、痛いよ……、どうしたの？」

困惑した声。

少しだけ目に宿る怯えの色。

「どう……したの?」

「……………」

僕はそんな彼女を目の当たりにしてやっと我に返った。

ゆつくりと彼女の手を離し、力なく前に傾けていた身体を元に戻す。

「ごめん……」

「あ、うん。き、気にしてないよ? もしかしたら穂乃果が変なこと言っちゃたのかもしれないし……海未ちゃんにもよく怒られちゃうんだ。あはは……」

優しい彼女のフォローの言葉。

「……………」

「……………」

明るい部屋に暗い沈黙が満ちる。

高坂さんは心配そうに僕の様子を伺っていた。

理由も分からず詰め寄られて、それでも僕の事を理解しようとしてくれる。

彼女の美点。彼女の輝き。

でも、今の僕にとってはその優しさがどうしようもなく憎い。

まだ可能性があるんだって思わせるその優しい瞳が!!

いつそのこと嫌われてしまえば楽になるんじゃないか。

——今ここで襲つてしまえば。

出来もしない事を考えて、想像して。罪悪感でボロボロになる心。

そんな度胸があるなら正々堂々告白していただろう。傷つくことを恐れて、その結果他の誰かを傷つける事態になんて陥らなかつたはずだ。

「穂乃果で良かったら相談にのるよ？」

柔らかに響く高坂さんの声。

意図せず拳に力がこもった。

君に何を相談するって？

相談したら解決してくれるのか？

渦巻く苛立ちと八つ当たりでしかない感想を抱く。

「……高坂さん」

叫びだしそうな自分自身を必死に押さえつけて、僕は絞りだすようにして彼女に向け

て語りかける。とてもじゃないけれど高坂さんの目を見ることなんて出来ない。机の木目に視線を走らせながら強く膝に爪を立てた。

なら、相談させて貰おうか。

僕は——形振り構わず底なしの沼地を藻掻いて進む。

「お願いがあるんだ」

「……………」

僕は語りかける。

優しい彼女に…………囁きかけた。

「高坂さん、今度僕と二人きりで…………」

しかして彼は壊れゆく——了

彼が差し出すは己のみならず

——二人きりで遊ぼう。

きいん、と静まり返った部屋に声変わりした青年の声が溶ける。

僕が口にしたのはそんなシンプルで分かりやすい、それでいて複雑な思惑の含まれた提案だった。

案の定、高坂さんの表情が一瞬固まる。澄んだ瞳が不安げに揺れ、僕の表情を懸命に伺おうとし始めたのが良く分かった。

「えつと……二人で？」

そうだよ。

僕は君と二人きりで出掛けたい。

コクリ、小さく頷いて僕は微笑んだ。出来るだけ自然に、彼女に余計な警戒心を抱かせないように心掛ける。柔和な表情、優しい目つき。意図的に作り出せるそれらの表情。

僕が今した提案は単純なもの。しかし、何処までも不気味で——歪でもあった。

別に深く考えなくとも解ると思う。彼女の友達と、二人きりで会う時間を作るといふ事がどれだけ異常かなど、子供にだって分かるだろう。

高坂さんからしても安易に許諾して良い内容では無いし、本来僕の立場ならこの申し出を口に出すことすらご法度。

だから流石の高坂さんも戸惑っているし。僕も自分が愚かな許されない真似をしているのを理解していた。

ただ……。

——手段を選んではいけない。

心の中で吐き捨てる。

僕は強く、血管が浮き出るほどに拳を握りこんだ。

——君のせいでもあるんだよ？ 高坂さん。

人知れず自嘲気味に笑う。

僕は思っていたんだ。

南さんの彼氏として君に近づいて、少しずつでも接点を増やしていけば、次第に、自然に距離が縮まっていくんじゃないかって。ゆつくりと、時間をかけさえすれば君が僕に振り向いてくれる日が来るんじゃないかって。

僕は思っていたんだ。

でも、それはきつと違う。

君を手に入れるためには僕自身が大きく動かなきゃダメだ。

何かが変わるのをただ指を啜えて待っているだけじゃどうしようもない。

友達の彼氏とはいえ、異性を自分の部屋に呼んでいるにもかかわらず、何の警戒心も抱いていない。気にすらしていない。目に浮かぶのは出所の分からない信頼と仲の良いい友人を——クラスメイトを見る時と同じ視線。

高坂さんらしいよね？

本当に……憎らしいほどに。

そんな君を動かす為には、もつと前に出る必要があるだろう。

「そう、二人で」

だから僕は踏み込んだ。

もしかしたら焦り過ぎているかもしれない。

もしかしたらどこか可怪しくなっているのかもしれない。

だけど、僕はこの足を止めないよ。

だって。

だって。

嗚咽と涙を必死に飲み込んだ。

——もう、僕は耐えられない。

人知れず零す弱音。

嘘を吐き続けられる自信がない。

南さんだってそうだろう。

きつと彼女だって苦しんでる。幼いころから一緒だった幼馴染に嘘を吐いてまで、彼女は僕の側に居たいと言った。自分に振り向かない、非道い男の胸を借りて泣きじゃくる姿を思い出す。

あの人の涙で濡れたシャツの感覚を僕は忘れることが出来ないだろう。
でも。

そんな彼女を見ても僕の心は揺れなかった。

健気な南さん。可愛い南さん。優しい南さん。

僕は色んな彼女を見てきた。嫌でも伝わってくる。彼女がどれほどまでに僕を想ってくれているのか。そして、どれほどまでに彼女が魅力的な女性なのか。何度も考えた。彼女を好きになりさえすれば、全てが上手くいくのだと。

僕は自分を本気で好いてくれる人と幸せになれるし、何より南さんが救われる。宙ぶらりんの状態で苦しみ続ける彼女が心から笑える日が来るのなら、それほど喜ばしいことは無い。

理解してるさそんなこと。

分かりきってる。

それでも尚、彼女が頭から離れない。

どう足掻いても、彼女の魅力に逆らえないんだ。

一度太陽を目にした人間は、その姿を忘れることは出来ないだろう。例えば地中に潜っても、夜を愛したとしても、あの輝きを記憶から消すことなんて不可能だ。南さんの儂く、美しい、包み込むような光。幻想的な月。それに触れる度……僕は高坂さんを思い出す。

——僕は君が欲しい。

僕の中に、消しようの無い欲求があった。

中学時代は小さなしこりでしか無かったその望みは、手遅れなまでに膨らみ、僕を蝕んでいる。もうこの想いからは逃れられない、無視なんて出来やしない。彼女を手に入れるか、失うか。そのどちらかの道しか僕には残されて居なかった。

だから僕は踏み出すよ。

今日、彼女と話してその決心がついた。

僕を男として意識してくれていないのなら、『ことりちゃんを羨ましい』という思わせぶりの言葉を安易に吐くのなら。……現状維持ではもう何も変わらないだろう。

「ダメかな？」

「えつと……、ダメでは無いよ？ だけど……」

友達を誘うかのように軽い口調で首をかしげる。

なぜなら、僕が好意を持っているということはまだ知らせるタイミングでは無いから。彼女が僕に対して仲の良い友人という意識以上の想いを持っていないとはつきり分かった今、距離を詰め過ぎるのも良くない。やり方を間違えば彼女は僕から離れていくだろう。そうなれば終わり。

「あ、他意は無いんだよ？ 折角、高校になつても話す機会が出来たから……君ともう少

し仲良くなりたかっただけで」

だから僕は、いつのまにか身につけていた屈託のない笑顔を浮かべてみせた。あくまで友達として、君と仲良くなりたいたんだと微笑む。

「あ……」

彼女は小さく声を漏らす。

高坂さんの身体から力が抜けるのが分かった。

——警戒を解くのが早過ぎるよ、高坂さん。

笑顔の裏で僕は眩く。

きつと、彼女は安心したのでだろう。一瞬だけ意図が読めずに戸惑ったものの、どうやら目の前の彼は私と仲良くなりたいたいだけらしい。そう思ったに違いない。

その証拠に彼女は少し恥ずかしそうに頬を染めた後、笑顔で頷いた。

「そうなんだ！ 穂乃果、嬉しいなっ」

ああ。

僕は想う。

眩しい。

そして。

憎らしい。

その無邪気さが、無自覚な魅力が。

「中学校では確か遊んだこと無かったもんね？」

ずいっと机に乗り出した彼女から、シャンプーか、それとも彼女自身か。扇情的な香りが届く。半袖から僅かに覗く白磁のように白く美しい二の腕と、僅かに膨らんだ胸元。お洒落とは程遠い部屋着が僕の目にはどうしようもなく魅力的に映った。

完全に僕を信じきった彼女が目の前に居る。

——今はこれでいい。

僕はそう自分に言い聞かせた。

全てを一気に変えることは不可能だ。人の気持ちなら尚の事そうだろう。だからこそ、前へ進むと決断したからこそより着実に足場を確保していかなくてはならない。ゆっくりと、計画を練って。

「それじゃ、何して遊ぶ？ 穂乃果楽しみだなあ！」

無邪気な笑顔。

本当に僕のことを信じきってるんだね。

なぜだろう。彼女が高坂さんだからだろうか？

人を疑うことを知らない、真っ直ぐで無垢な彼女故なのか。

——いや、違う。

僕はすぐに安易な考えを打ち消した。

彼女もバカじゃない、何も考えていないわけではない。事実、二人で遊ぼうという話を持ちかけた瞬間は明らかに何かを考える素振りを見せた。きっと、南さんのことや僕自身の意図を考えていたのだろう。

そんな、大事な事にはちゃんと聡明に反応する彼女が僕を信じた理由。

やはり——過去の僕を見てきたからだろう。

この人なら信頼するに足る。

そう判断してくれたに違いない。

いつもそうだ。

こうして僕が嘘を並べる土台には、いつも昔の僕の影が顔を覗かせる。心から高坂さんの事が好きで、彼女と話をするだけで、声を聞くだけで嬉しかったあの頃。ちつぽけな自分を変えようと一生懸命努力していた自分。南さんが好きになってくれた僕。

そんな僕がいるからこそ、今の僕はこうして人を騙すことが出来ている。

それが堪らなく嫌だった。

『こんなことをするためにお前は自己研鑽に励んでいたのか?』

僕の影が言う。

一番輝いていた頃の彼が囁く。

やめろ、やめてくれ。

『彼女と話したいがために磨いた話術は、彼女を手に入れるための手段に成り下がり』

彼はふとした拍子に現れる度、僕に告げた。

『後から付いて来ていた何事にも代えがたい曇りなき信頼は、誰かを騙す武器に変わった』

仕方ないじゃないか!!

僕は心のなかで叫んだ。

強引に過去の自分からの言葉を掻き消して、今の自分を正当化する。

僕はそうせざるを得ない道を選んだんだ!!

彼女を手に入れるにはそうするしか無かった!!

今の自分が例え褒められたものでも無いとしても、誰にも責める権利なんて無い!!

そう、例え自分自身であつたとしても!!

何度繰り返したかもわからないそんな作業。そうでもしないと僕は潰れてしまいそ

うで。今ある自分を疑ってしまえば全てが終わる。足を止めてしまえば、そのまま底なし沼へと沈み込んでいくだけだ。足搔かないと、精一杯、どんな手を使っても。

必死で過去の自分の影を搔き消そうと藻搔く。

明らかに僕の精神状態はおかしな方向に向かっていた。

数カ月前の僕はもう居ない。

「うーん。僕はどこでも良いんだけど……」

「えー？ それはズルいよ〜」

「あはは、ごめんごめん。でも、高坂さんとならどこ行っても楽しそうだよね」

内心の葛藤をおくびにも出さず、僕は答えた。

僅かに高坂さんが動揺して、頬を赤く染めたのを確認する。

——そっか。やっぱり男慣れしてはいないんだね。

安心。

同時に、自身の中に渦巻く独占欲が少しだけ満たされたのを感じて……吐き気にも似た感覚に襲われた。もちろん、そんな感情の起伏に振り回される僕はもう居ないけれど。

「もう！ 彼女がいる人がそーゆーこと言っちゃダメだよ!?!」

「あ。そんなつもりは無かったんだけどな……」

素直に謝つて頭を搔いてみせた。

頭のなかに南さんのことはもう欠片ほども無い。

罪悪感すら、消え去つていた。

そこからは割とスムーズだった。

彼女は部活動に入っている訳では無かつたし、入学して二ヶ月ほど経つて新しい学校にも慣れ始めた今、別段お互いに忙しい訳では無い。なので、スケジュールを合わせるのは簡単だった。

雑談を交え、笑顔を交わし合いながら計画を進める。

カラオケにしようか、ゲームセンター？ 映画とかも良いよね。

弾む会話、トントントン拍子に進むプラン建て。

僕にとっては夢の様な時間だ。

まるで恋人であるかのように同じ部屋で、次遊ぶ計画を立てる。

そう。南さんともしたことの無い経験。

赤の他人から見たら奇妙に思えるだろう。付き合ってる者同士がデートの計画すら一緒にたてたことがないのか——そう考えるのが普通。ただ、僕が南さんとそういう時間を過ごしたことが無いというのは、紛れも無い事実だった。

なぜなら、いつもあちらからの——一方的な誘いだったから。

当たり前だ、僕からデートに誘うことなんて殆ど無い。もちろん、彼氏である手前、誘われたら行くし、いぎ顔を合わせれば楽しい時間を過ごしてる。その過程で次のデートの話をするにはあるけれど、いつも最後に決めるのは彼女だった。

僕は曖昧な返事を繰り返して、計画が勝手に決まるのを待つだけ。
僕らの歪な関係を現す光景。

多少の同情はしてるよ。ふとした瞬間、南さんが哀しげに瞳を曇らせる瞬間があるのは事実だし、話し相手の感情を読むのに長けた僕がそれに気が付かないわけがない。決して乗り気ではない僕を何度も誘ってデートをするということがどれ程彼女を苦しめているのか、僕は理解はしているつもりだ。

でも、どうしようもないだろう。

同情しても、心はあげられない。

だけど、彼女が望むのは僕の心だけだ。

だとしたら、南さんの感じる辛さはある種仕方のないものだと思ふ。冷たいかもしれないが、苦しいのは僕だって同じだ。悲しいのは僕だってそう。何も彼女だけじゃ

ない。お互いが同意の上でした選択の結果、お互いがどうなろうと……知ったことでは無いんだよ。

——ごめんね。

そう、心のなかで呟いた。

「どうしたの？」

「いや、何でも」

かぶりを振って彼女のことを頭から振り払った。

今は目の前のことだけに集中したい。

「とりあえずは駅前でぶらつく感じが良さそうだね？ カラオケとかはその場のノリで決めてもいいし、なんならまたラインで話しても遅くないし」

「うん、そうだね」

につこりとお互い頷き合う。

そのまま、話は纏まるかに見えた。

しかし。

ふと、高坂さんの表情が曇った。

「あ、でも……」

手を顎に当てて、少しだけ困ったように宙を仰ぐ。

「やつぱり、二人きりはことりちゃんに悪いかな……？」

ああ。マズイな。

僕は素早く彼女の表情を伺った。

困ったように微笑みながら、こちらの様子を伺っている。本当に私と一緒に遊んでもいいの？ そう問いかけられているようだ。予定が具体的に決まりそうになって、やはり幼馴染のことが気がかりになったのだろう。高坂さんらしい優しい気遣いだ。

——でも、今はそれが邪魔でしか無い。

僕は急いで頭を回転させていた。

このチャンス逃すわけにはいかない。

今、二人きりで部屋にいる事自体奇跡とも言える偶然なんだよ。ふと穂むらに立ち寄って、妹さんの意図的ではないにしろ適切なフォローがあつてこの時間を過ごすことが出来た。こんな機会おそらくもう二度と無い。

次高坂さんと会えるのは南さんと一緒に居る時だけだ。

さすがに、あの娘の前で二人の約束を取り付けるのは困難。そしてさすがに酷というものだろう。だから、今しかないんだ。この何もしなければ絶対に縮まらない彼女との距離を詰めるためには、この機会をものにするしか無い！

「そうだね……」

考えろ。

理由を探せ。

二人きりでも出かけられる言い訳。

——一度だけでも二人で出かけることに意味があるんだ！

僕は叫ぶ。

それは、今回のデートで全てを決めようとしているからでは無い。

【二度二人きりで遊んだ】

その事実さえ作れば二回目は比較的楽に誘える。

そう考えているからだつた。

人間の心理なんて単純なもので、一度ボーダーラインを超えてしまえば二度目は驚くほど簡単に境界線をまたげるようになる。このチャンスに高坂さんと二人で遊ぶことが出来さえすれば、きつと二度目の誘いにも乗ってくれるだろう。僕の対人におけるコ

ミニニケーション能力や積み上げてきた信頼さえあれば容易いはずだ。少し流されやすい部分もある高坂さんなら、多少強引にでも誘い出せるに違いない。

だからこそ、ここが勝負所。

「うーん、どうしよつか」

曖昧な返事をしながら考える。

高坂さんはちよつとだけ残念そうにしながらも言った。

「穂乃果も君と遊びたいんだけど……たしか、そろそろことりちゃんと付き合い初めて三ヶ月目だよな？ 穂乃果、恋愛に関してはあんまり詳しくないけど、三のつくタイミングはすつごく大事だって聞いたんだ。三日目、三週間目、三ヶ月目、三年目。別に、穂乃果と遊ぶのを急ぐ必要は無いし、これからもことりちゃんとデートしたついでにでも、こようやって会ってお話してくれるでしょ？」

不器用ながら、拙いながらも優しい言葉。

幼馴染と、僕両方を思いやった台詞を聞く。

しかし、僕が感じたのは彼女への賛美でも尊敬でもない。

勝利の確信だった。

——それだ。

「そう、三ヶ月目なんだよ」

内心の笑みと渦巻く意図を隠しながらゆつくりと言葉を紡ぎ始めた。落ち着け、大丈夫だ。僕ならこの機会をモノにできる。

「だよね！　もう、羨ましいなあ。折角だからデートしてあげたら？　ことりちゃん喜ぶよ？」

「んーん。実はちよつと考えてることがあつてね」

何を犠牲にしても。

何を利用してでも。

「三ヶ月記念に、プレゼントを贈ろうと思うんだ」

誰を犠牲にしても。

誰を利用してでも。

「ことりさんには内緒で」

南さんを犠牲にしても。

南さんを利用してでも。

「だから、高坂さんにプレゼント選び手伝って欲しいんだ。……園田さんは忙しいだろうから、二人で。ダメかな？」

高坂さんの顔がばあつと明るくなる。

そこから見て取れるのは僕が自分の幼馴染を大切にしていることが分かった嬉しさ
と、サプライズに対する純粋な興味。——そして、僕自身と遊びにいけることを楽しみに感じる気持ちだった。

「それなら喜んで！」

確かな手応え。

僕は一步自分が前に進んだ実感を得る。

それは、恐ろしく……虚しい感覚だ。

僕は南さんと一緒に作った嘘の足場でもって高坂さんの前に辿り着いた。そして、過去の自分の幻影を利用してまで彼女に近付いて、話をした。本当に大好きな相手を騙し、嘘でもって取り入ろうと画策する。

——そして今回、僕は南さんをも嘘の為に差し出した。

許されることじゃない。

解ってるよ。

狂ってる。

理解ってるよ。

でもね。

「だから、南さんには内緒にして貰っても良い？」

「うんっ！」

僕は決めたんだ。
この道を行くと。

彼が差し出すは己のみならず——了